
窓サン

アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓サン

【Nコード】

N8428Y

【作者名】

アイス

【あらすじ】

世界には、『万能の林檎』というものがある。それを口にとると、それぞれ特有の『万能の力』を手に入れることが出来る。

その力は本来なら時が流れるにつれて自然と消滅するのだが、心のどこかで少しでも『力』を求めている場合、『力』は決して消えることはない。

彼は、サンタクロースはそういった人々を、林檎の力を求め続けることから『林檎人^{りんごじん}』と呼んでいる。

では、何故彼らは『力』を求め続けるのだろうか？

『愛』のためである。

愛する者を見つめたいから、声を聞きたいから、
そして、守りたいから

これは、そんな強欲かつ純情な彼らが懸命に紡ぎ出す、甘くてほろ
苦い『愛の物語』である。

『彼』のご案内（前置き）

どうも！ しばらく留守にしていたアイスですww お久しぶりで
すvv

クリスマス用に一つ長編を書いていこうと思います。

まずは前置きです。

『彼』のご案内

サンタクロース Santa Claus クリスマスの前夜、トナカイの引くそりに乗って子供たちに贈り物をする伝説上の老人。白ひげで、赤い服を着ている。

これが、一般的に知れ渡ったサンタクロース像だ。実在するか否かはともかく、何百年も前から、世界中の子供達に夢と希望を与える存在として語り継がれている。

ん？ そっというお前は誰だって？

そうだね。とりあえず、ここではサンタクロースということにしておこう。

さて、今からこの本を手にとった君に『愛の物語』を話そう思う。興味を持つのも、何を言ってるんだと本を閉じるのも君の自由だ。好きにすると良い。

……おや、聞いてくれるのかね？ それじゃあ、さっそく始めよう。

これはクリスマスシーズンに起こった、とある人々の出会いの記録である。

彼らはごく普通の生活を送る一般市民だが、常人の域を超えた『万能の力』を持っている。

かつて『万能の林檎』を偶然にも口にしたことで、それぞれ特有の『万能の力』を手に入れたのだ。

『万能の林檎』とは世界に三本、ドイツ・アメリカ・日本でそれぞれ一本ずつしか確認されていない珍種である。その中でも、口にしておいて『万能の力』を得られる果実はごく僅か。あまりにも数が少ないため、世界はその存在を知らない。と、一つ言っておきたいことがある。

『万能の力』はね、手に入れたとしても、本来なら時が経つにつれて自然と消え去っていくものなんだ。

だが、『力を手放したくない』と、心のどこかで思っている場合は話が別だ。体が中に秘める力を残そう残そうと働きかけてしまう。そして彼らのほとんどは、『万能の力』を捨てようとはしない。何故だろうか？

理由は実に様々だ。だが、一つ共通点がある。

『愛』だ。

彼らが『万能の力』を求める理由は、それぞれが愛するものにある。

愛するものを見つめていたいから、声を聞きたいから、愛するものを、守りたいから。

林檎の『万能の力』を手放さない彼らを、私は『林檎人^{りんじゅうん}』と呼んで

いる。現在、数十人の林檎人が存在するが、ここではまず六人の林檎人を挙げるとしよう。

甘酸っぱくてほろ苦い、そして懸命な六つの『愛の物語』を。

『彼』のご案内（後書き）

それでは、はじまります。

最後まで付き合ってくださいねば、めっちゃ嬉しいです
ミ

？・ドイツ　バイエルン州　ニュルンベルクにて　（前書き）

えー、主人公三人いるので、プロローグも三つあります（おい）

まずはドイツ編からww

？・ドイツ　バイエルン州　ニュルンベルクにて　

人口五十万人を超えるバイエルン州でも指折りの大都市、ニュルンベルク。

商工業・文化・経済が盛んであると同時に、ドイツの東西南北を結ぶ鉄道交通の要衝でもある。旧市街は城壁で囲まれており、赤レンガの街並みや石畳の道など、中世の雰囲気漂わせている。それ故に、特に旧市街は観光名所として人気がある。

旧市街の西には、ペグニッツ川に架かるマックス橋があった。ペグニッツ川沿いには昔ながらの建物が数多く残っており、絵になる風景が広がっている。

その橋に、赤毛を三つ編みにして束ねた一人の少女がぼつりと立っていた。手すりに腕を乗せ、川の水面をぼんやりと眺めている。その顔には表情というものがなく、傍目では何を考えているのか分からない。

ふと、少女の口が開いた。唇がゆっくりと動き、一つの言葉を紡ぎ出す。

「会いたい」

少女は顔を上げ、体を翻して走り出した。

* * *

この街には、木組みの古い家々が連なるヴァイスゲルバーという名の小路がある。張り出し窓が美しいという以外にはこれといった特徴は無いが、おとぎ話のような可愛らしい家々は、古き時代の趣を

感じさせる。

それ以外はとりわけ地味な小路に、古びた小さなパン屋が佇んでいた。入口には『パン工房 蜂の巣^{ビードンコルプ}』と書かれた黒板が立て掛けてあり、隣にロッキングチェアに座る等身大のテディベアがある。時折ゆらりと揺れる愛くるしい姿が、萎びた店に暖かさをもたらしている。

店内には数名の客がいる。店主の仏頂面を全く気にせずにパンをせっせと選んでいる者ばかりで、おそらく常連客がほとんどだろう。レジに客がパンを持っていき、店主が金額を言々とサツとコインが出された。流れるように会計が終わると、緑の瞳の店主はパンを袋に入れた。

「はい、ありがとうございます」

パンを渡し、客が店を出ていく。また店内の客がレジに來ると会計を済まし、パンを袋に入れて渡す。日常的な光景が、パン屋の中で淡々と繰り返されていく。

その店の前に女が立ち止まった。

切り揃えた栗色のショートボブヘアに、白いコートが良く映える女性だ。顔に掛かった横髪を退かし、顔を上げ、瞬きをする一つ一つの仕草に品があつて、それなりに顔の整った彼女をより美しく魅せている。

女は肩紐の付いたバッグを片手に、ハイヒールを鳴らして店の古い扉を開いた。個人経営の小さな店なので中は狭く、入った側からレジが目に見え込むくらいである。

「いらつしゃ……………」

女を見た瞬間、中年の男店主の顔色が変わった。眉を顰めて彼女をじろりと睨み出す。

女は涼しい顔でトレーを手に取り、ホットドックをいくつか乗せてレジへと歩み寄る。無愛想面に拍車が掛かった店主に恐れを抱いて

いるのは、全く無関係な店内の客達の方だった。

店主は睨み続けながらトレーを受け取り、会計を始めた。女から金を受け取り、袋にホットドックを詰めていく。そして袋を閉じたところで店主の重い口が開いた。

「何度言ったって、見舞いには行かないぞ」

眉を顰める店主に、女が困ったような笑みを浮かべる。

「彼、あなたに会いたがってますよ」

「冗談じゃない」

「やっぱり、まだ怒ってらっしゃるんですね」

「当然だろ。自分の娘を、命の危険に晒されたんだからな」

物騒な台詞が店主の口から吐かれる。

だが無愛想であっても、店長としてその辺りは配慮したのだろう。最後の台詞だけは、女にしか聞こえないよう小声で唸り出されたものだった。

恨み言としか取れない台詞を小声で、それも一人に絞って向けただけあって、背筋が凍りつきそうな憎悪を感じ取ってしまう迫力があつた。その無愛想な顔付きも手伝って尚更だ。

「店長、彼が本気でお嬢さんを見殺そうとしたと思ってるんですか？」

「弄んだろっつが」

「ですが、お嬢さんを見殺しにする気も弄ぶ気もありませんでした。彼はただ」

「もう言っつな！」

堪忍袋が切れたのか、店主は言葉を遮ってついに怒鳴ってしまった。さすがに客の視線がレジの方に集中する。店主は「すいません」と客達に頭を下げ、目の前の女を更に睨んだ。

「二度と来るな」

静かだが、その分怒気の籠った声で言い放った。

女は目を伏せながら、店主の手にある袋に手を伸ばす。怒りで袋を渡すことを忘れていたのか、店主がハッと目を見開く。そんな彼を余所に女はまた微笑みを浮かべた。

「失礼します」

それだけ言い残し、女は店を後にした。店主は小さな溜め息を吐き捨てた。

本当なら、私は謝罪をしなければならぬ立場なのだ。嫌というほど分かっている。

でも、娘は関係無い。

それを思うと、どうしてもああやって怒りが込み上げてしまう。だからといって、彼を加害者呼ばわりすることは出来ない。

彼の、彼らの人生を大きく左右してしまったのは、この私なのだから。

負い目を感じる反面、怒りで謝ることが出来ない、どうしようもない自分がいる。

私は、どうすればいい。

店主はレジに立ちながら、怒りと自責の念に苛まれ続けるのであった。

* * *

レイラ・ヴィーンはをさっきのパン屋を出た後、徒歩で十分ほどの病院に足を運んだ。受け付けで話を済ませ、奥のエレベーターに乗る。三階のボタンを押してふうと息を付いた。

やっぱり、許してはもらえないか。
レイラはふう、と憂鬱そうに溜め息を付いた。彼が怒るのも無理は無い。

理由はともあれ、彼女を数日間軟禁したのだから。

三階に着くと、神妙な顔付きでエレベーターを降りた。廊下を進み、『308号室 セシル・シュライファー』と書かれた病室の前で立ち止まる。

彼とは付き合い初めて半年以上経つが、未だに彼のことがよく分らない。

彼自身、自分のことがよく分からないと言う。

扉を開けると、レイラはベッドに歩み寄って椅子に腰かけた。

まだ年若い青年で、眼鏡を掛けたままの寝顔からは少年のあどけなさが見える。瞼を閉じていても整っているとはつきり分かる端正な顔立ちで、金色の髪がよく映えている。

「また、眼鏡掛けたまま寝て」

何より衝撃的だったのは、彼は私のことも

。

だけど、それには理由があった。その理由を知っている今だからこそ、尚更こう思える。

何があっても、絶対にこの人を手放したくない。

レイラは笑みを零しながら青年の眼鏡を外す。眼鏡を小棚に置き、俯いて自身の顔を下へと掲げ出した。青年の顔に、ゆっくりと彼女の顔が重なるうとした時だった。

ふいに後頭部に軽い衝撃が走り、体が下へと傾く。そして唇に温かい感触が伝わった。

一瞬驚いたものの、彼女はすぐに己の状況を理解し、うっとり目を閉じた。

彼女は今、目の前の青年に頭を引き寄せられ、口付けられている。柔らかくほのかに温かい唇の感触と、頭を抱き寄せたまま離さない手のぬくもりが、何よりの証拠だ。レイラも応えて、手を彼の頭に撫でるように添えた。ふわりと柔らかい髪の感触が直に伝わる。

傍から見たら破廉恥極まりない状態が数秒続いたところで、彼の手が彼女の頭から離れた。それを合図に、レイラは体を起こした。

「ごめん、やっぱり駄目だったわ」

青年の睨めがゆっくりと開いた。鮮やかな色合いの碧眼が、彼女の悲しげな微笑みを捉える。

「そうか。ありがとう、レイラ」

セシル・シュライファーが明るい調子で微笑む。レイラも釣られて笑みを浮かべた。

「ねえ、いつから起きてたの？」

「『また、眼鏡掛けたまま寝て』ってところから。全く、朝っぱらから何をするかと思えば」

口ではそう言いながらも、満足げな笑みを浮かべた。調子に乗って体を勢い良く起こす。

「　　」

だが、不意に鋭い痛みが胸を走り、最後まで起こし切ることが出来なかった。

「まだ無理に動かしちゃ駄目よ」

レイラは顔色を変え、顔を歪めて胸を押さえる彼をそつと寝かせた。「ちえ」と口を尖らせる彼は、お菓子を買ってもらえずに拗ねる子供そのものだ。

「来たばかりで悪いけど、用事を思い出したからちよつと席を外すわ。すぐ戻ってくるからね」

「分かった」

レイラは弟をあやす姉のような笑みを浮かべて立ち上がり、扉へと歩き出した。そして扉を開く寸前にセシルの方へ振り返った。神妙で、悲しそうな顔をしている。

「ねえ。ついでに、もう一度来てもらえるように説得してみる？」

「いや、もういいよ。あの人、とことん頑固だから一度決めたら動かないから」

レイラは「そう」と再び背を向けて扉を開いた。扉が閉まると共に、再び静寂が訪れる。

「罰が当たった、ってやつかな」

静かな部屋で、ぼそりと呟いて苦笑した。

興味を持った人に近づき、少しだけその人の領域に足を踏み込んでみる。

ただの気まぐれだから、深く関わる必要は無い。本を読んでいるような気分に入るだけで十分だ。関わる人達を、物語の登場人物に置き換えて。

でも、今回に限っては少しも関わるべきではなかった。

お互い、知らない方が良かったんだ。

きつと、これまでで最悪な気まぐれだった。僕はそう思う。

セシルは去年のクリスマスシーズンを思い出しながら、天井をぼんやりと眺め出した。

？・ドイツ　バイエルン州　ニュルンベルクにて　（後書き）

次はアメリカ編ですww

文を少し変えました　詳しくは活動報告にて

？・アメリカ　　ニューヨク州　マンハッタンにて　（前書き）

アメリカ編のプロローグです。ドイツ編とは繋がりありません？

？・アメリカ　　ニューヨーク州　マンハッタンにて　　

マンハッタン区の南部、ダウントウンにある町、グリニッジ・ヴィレッジは街路樹と調和した煉瓦の家々が特徴的で、摩天楼だらけのニューヨーク内でもお洒落な街並みである。また、この街には昔ながらのカフェやレストラン、ナイトクラブが数多くある。

明け方を迎えようとしながらもまだ暗い冬の下で、グリニッジ・ヴィレッジの一角に佇む『CANDLE』^{キャンドル}は青白い光を看板から静かに放っている。

だが、扉の先は一転して賑わっていた。店内を幻想的な紫と赤が照らす中、多くの若者が夜ということも忘れる勢いで大騒ぎしていた。彼らの視線の先では、スポットライトの光を一身に集めたロックバンドが楽器をかき鳴らし、店内に雄叫びを轟かせている。

女将はカウンターからその光景をぼんやりと見つめていた。女将は一つに束ねた黒髪に黒い瞳、一重瞼に健康的な肌色と、明らかに東洋人の風貌をしている。

^{ディヤンファ}天焰花は腕時計を見てもうすぐ閉店の時間であることを確認すると、カウンターを出て壁沿いに歩き、店の端まで移動した。

立ち止まったのは、『STAFF ROOM』という表札の掛かった扉の前だった。ヤンファはドアノブを捻って扉を開け、中に入った。扉を閉めても、店内で暴れる音楽と歓声がまだ煩いくらいに耳に飛び込んでくる。だが、この店に慣れきったヤンファからしたら、部屋に入って扉で遮っただけでも大分音が小さくなったと感ずるのだった。

この部屋は、主にこの店で演奏するバンドの控え室として使われている。化粧台にパイプ椅子、洋服掛け、その他の雑多などでかなりのスペースを取っているが、それでも控え室にしては大きい方で、数人が入っても窮屈しない程度の広さはある。

「起きたかなー？」

ヤンファは散らかった部屋の中に、二人の男女の姿を確認した。

女の方はパイプ椅子にもたれていた。ショートカットの茶髪と小生意気そうな猫目、そしてジーパンに肩出しのセーターという薄着が、彼女の自由奔放さを増徴している。

「あ、ヤンさんお疲れ。レオン、ヤンさん来たよ」

男の方は化粧台に突っ伏していた。余程深い眠りに陥っているのか、女が体を起こして黒髪パーマを指に巻いたり乱暴に引っ張ったりしても微動だにしない。

「レオン、ねえレオンってば。起きろコラ」

ジェイミー・アンダーソンは男の髪ごと頭を持ち上げ、化粧台に叩き付けるといふ暴挙を試みた。だが、それでもピクリともしない。

「あれま、どしたの？ まさかあまりの疲労で意識ぶっ飛んだとか？」

「意識はあるわよ。『うう』とか『があ』とか言ってたし。どんだけ眠り深いんだよ、こいつ」

拳句の果てには髪から手を離し、頭に靴の裏を押し付けるといふ暴君じみた行為に走ったが、んぐうと唸り声を上げたただけだった。

「仕方ないよ。クリスマス前後はライブが多かった上に、誰かさんが足突っ込んだ騒ぎに巻き込まれちゃったし、新年に入れば入るでまたライブ三昧だったしね」

「ち、世話掛かるわねえ……っと！」

ジェイミーが足を振り上げて男の頭に振りおろした。化粧台に盛大に叩き付けられたところで、男はようやく「ぐう！」はつきりとした呻き声を上げた。

「お、今度は手応えあり？」

「あるといいねえ。いや、絶対にあるよ。今のはさすがに。無かったら病院沙汰になる」

平然と暴力行為を働くジェイミーはもちろん非常識だが、今までの暴力行為を目の当たりにしても顔色一つ変えずにのんびりとした口調を保っているヤンファも十分非常識だろう。

そんな非常識極まりない女二人に見守られながら、男はようやく体を起こした。眉を顰めて頭を押さえてはいるが、盛大な被害は全く感じられない。

「お前な……………」

レオン・エヴァンスの脳はまだ覚醒したばかりだが、すぐに状況を理解してジェイミーを鬼の形相で睨み付けた。ジェイミーは怯えるどころか人を小馬鹿にしたような笑みを見せる。

「普通に起こせよ！」

「起きなかったじゃない」

「だからって頭に蹴り咬ます馬鹿がどこにいる？」

「いるわよここに」

「開き直りやがって！」

「はいはい、ストロップ」

これではキリが無いと彼らの間にヤンファが入って宥めた。

「痴話喧嘩はこれくらいにして、そろそろ帰ろうさ。もう朝になるんだし」

「痴話喧嘩って何ですか？」

「誰にだってそう見えると思うけどねえ」

「こいつはオカマなんですよ？」

レオンが声を張り上げて指差した先は、どう見ても女にしか見え無いジェイミーだった。

「大丈夫だって。同性結婚で結ばれたカップルって、この国じゃいっぱいいるんだから」

「そういう問題じゃないでしょう？」

「どっちにしろ、アンタには重大問題なんじゃない？」

口を挟んできたのは、オカマだと言われた当の本人だった。

「アンタもうオヤジなんだから、結婚願望あるなら早く手え付けないと手遅れになるわよ」

「誰がオヤジだ！ 俺は昨日三十になったばっかだぞ！」

「中学生から見たら三十代の男なんて立派なオヤジよ。つーか、だれがオカマだつて？」

「お前だお前！ 男のくせに女の格好して女みたいな喋り方してる時点でそうだろ！」

「だからあ、オカマじゃないって。何度も言ってるじゃん。ただのあ・そ・び」

「もつと質悪い！」

「言つとくけど、女装趣味があるのは認めてるわよ。こんなにスタイル良くて可愛いんだもん」

その自慢げな一言で、『オカマ』じゃなくて『女装癖』の方が効果的だったと後悔した。

怒鳴ってばかりだったレオンは、顔を真っ赤にして肩で息をする有様となっていた。

「まあ、アンタが女装なんてしたら、かなりのお笑い種だろうけど」
デカイ図体の負け犬と化したことを確認したところで、ジェイミーはいきなり肩出しのセーターを脱ぎ出した。レオンは反射的に後ずさりし、バツと目を片手で覆う。

「そんなに恥ずかしい？ 男の裸を間近で見るの」

微かに開いた指の隙間から見たのは、下着を脱いで胸のパットを取るジェイミーだった。

「あれえ？ まさかと思うけど、興奮してる？ うわ、きつも」

「んなわけあるか！」

ジェイミーの言葉と上半身によって、自分がどれだけくはぐな行動を取っているのか理解し、バツと顔から手を離してジェイミーを睨みだした。

「何じろじろ見てんだよ。気色悪い」

ジェイミーの口から発せられたものだったが、声は若い男となって

いた。

「えー、もう男に戻っちゃうの？ つまんないなあ」

顔を赤くするレオンを余所に、ヤンファは相変わらず平常のままだった。

「男に戻る用事が出来たんだよ」

ジェイミーは淡々と語りながら洋服掛けから長袖を取り、着々と着替えていった。最後に洋服掛けからコートを取って羽織る。

「男に戻ったとはいえ、気を付けるんだよ。あんた可愛い顔してんだから」

ジェイミーは「ばーか」と憎たらしい返事をしながら床のシヨルダ―バッグを手に取ると、レオンにまた勝者の笑みを差し向けた。表情や仕草も完全に男と化している。

「じゃあなオツサン。せいぜい良い夢見ろよ」

それだけ言い残すと、ジェイミーは扉を開けて店内へと踊り出した。「すっかり振り回され役になっちゃって、あんたも大変だねえ。見てて楽しいけど」

ヤンファのフォローだかおちよくっているのか分からない発言に、今度は溜め息を付く。

「確かに乱暴だし口の利き方がなっちゃいけないけど、根っからの悪い子じゃないよ」

「別に、嫌いではないんですよ。ただ、掴み所がなくて苛々するだけ」

「そうかなあ。あの子は素直じゃないだけで、意外と分かりやすいと思うけど」

全く正反対の意見に、レオンは思わず怪訝そうに眉を顰めた。

「分かりやすい？ あいつが？」

「うん。まあ、レオンくんは素直過ぎるから、あの子のが分からなくても無理ないよ」

ヤンファは笑いながらサラツと言いのけるが、レオンとしては「単細胞」と言われたようでどうも腑に落ちなかった。実際、裏を返せ

ばそういう意味のはずだ。

「さてと、そろそろ店に戻ろうさ。もうすぐ閉店だしね」

ふて腐れるレオンなどお構いなしに、ヤンファは控え室を出て行った。本当にいつだってマイペースな人だ。だからジェイミーの身勝手な言動に振り回されたりしないだろう。

まだふて腐れていた気分だったが、マイペースなヤンファのことだ。もたもたとしていたら閉店後の店の中に閉じ込められてしまう恐れがある。それは勘弁願いたかったので、レオンはパイプ椅子から重い腰を上げ、控え室を後にした。店内を揺らす演奏は既に止んでいて、閉店の合図でもあるBGMが流れていた。

カウンターに入ったヤンファに「お疲れ様です」と挨拶をしてから店を出て、家路に着くべく歩き出した。そして、すぐ側の路地裏に入った時だった。

ガツという音と共に、何かが行く先を遮った。

踏切の遮断機のように前を塞いでいる。暗くてよく見えないが、どう考えても人間の脚だ。それもよく知ってるクソ生意気なガキの。

「おい」

行く手を遮ったのは、壁に寄り掛かって靴の裏を前の壁に押し付けるジェイミーだった。

「てめえにも用があることを思い出した。ついて来い」

拒否権なんざねえよと言わんばかりに顎で使ってきた。レオンはまた溜め息を吐く。

「人が家で一息付こうって時に、一体どこに連れてく気だ」

「馬鹿かお前？ てめえと行くとこなんざ決まってるだろ」

確かに、このクソ生意気なガキと一緒に並んで行く場所なんか一つしかない。

こいつの家だ。こいつの姉、エミリの部屋。

いちいち勘に触るガキだが、去年のクリスマスシーズンで確信したことがある。

彼の言動は、全て姉を家族として深く愛するが故だということ。

それを知っているからこそ、ため息を吐きつつも彼の言動を憎めないレオンであった。

？・アメリカ 〉 ニューヨーク州 マンハッタンにて 〉 (後書き)

次は日本編ですww

？・ 日本 〽 東京都 渋谷にて 〽 (前書き)

日本編のプロローグですww 前回と同じく、これも他のプロローグとは一切繋がありません？

？・日本　　東京都　渋谷にて　　

渋谷駅南口から徒歩三分の閑静なエリアに小さなバーがあった。飾り気が無いものの、木材をふんだんにあしらった外装と地下への階段が、隠れ家のような雰囲気醸し出している。『Alice』と掘られた洒落たデザインの看板が、ぼんやりと店を照らしている。その店の前に、左の口元に黒子がある長身の青年が立ち止まった。少し癖のある黒み掛かった茶髪は肩に届くか届かないくらいのミディアムヘアで、瞳はスツと引き締まっていながらも、きつい印象を与えない優しさがある。

氷月燦太郎ひづきさんたろうは木の扉を押し開き、足を踏み入れた。この時間帯はまだ開店したばかりで、客の数が少ない。カウンターに向かうと、そこには親友とマスターの姿があった。

「よつ」

後ろから声を掛けると、親友の金亮しんがねがこちらを振り返った。

「こんばんは……って、あれ？　何かほっぺ、微妙に腫れる気がするんですけど」

「大したことない。ちよつと用事を済ませてきただけや」

「はあ……」

逆立った金髪に野生の狼を思わせる鋭い瞳、右耳の赤いピアスと、店内でも悪目立ちしているパンク風の格好だが、近寄り難い外見とは相反した穏やかな性格で、ごく普通の健全な大学生だ。男にしては小柄で、派手な外見と鋭い目付きを取ってしまえば迫力など欠片も無い。

「モーツァルトミルク」

亮の隣に座って早速注文すると、マスターは「あいよ」と返し、カクテル作りに取り掛かった。バーのマスターをやっているだけあって、手慣れた動作は俊敏かつ鮮やかである。

「あの、燦さんさん、何かあったんですか？」

ぼおつとマスターを眺めていたら、ふいに亮が声を掛けてきた。

「何でや」

「頬杖付きながら、指をトントンって動かしてるから」

指摘されたことで、いつの間にか頬杖を付きながらカウンターを人差し指で軽く叩いていたことに気が付いた。咄嗟に手の位置を元に戻す。

何かあったのか？ その指摘も凶星だった。

でも、こいつがそんな鋭い洞察力を持っているとは思えない。

「だから何で」

「嫌なことがあった時にする癖だって、マスターが言ってた」

「なるほど」

自分の心境を暴かれるのは不本意だが、このマスター、彩宵沢聖さようざわせいの発言なら納得出来た。

「凶星か。普段からクールぶってつけど、意外に分かりやすいよなあ。アンタ」

マスターがシェイカーを振りつつ口を挟んだ。してやったりって顔でムカつくわ。

思いつきり舌を鳴らしたかったが、それでは相手の思う壺なので内心で舌打ちをする。

「俺のこと分かりやすい言うのは、あんただけやで」

「そうか？ じゃあ俺の洞察力が並はずれて優れてるってことで」
アホなことを言いながらマスターがカクテルを差し出す。受け取ったグラスに唇を付けて流し込むと、チョコレートチョコレートの甘ったるさが口いっぱいに広がった。

甘美な味わいに酔いしれていると、ふと話題が脳裏に浮かんだ。今の心境をこれ以上暴かれたくない燦太郎としては、実に都合の良い話題だ。

「そついやお前、希実のぞみちゃんとはどうや？」

この一言で、グラスに口を付けた亮の顔がサツと真つ赤に染まった。
「えっと、それは……………」

口にするのも恥ずかしいのか、亮は自らの言葉をも呑み込むかの如くカクテルを一気に飲み干した。だがそれが返って仇となり、ゴホゴホッと盛大に咳き込む羽目になった。

「おいおい、落ち着きや」

何もむせることないやろと呆れながらも、すぐに亮の背中に手を置いてさすってやった。酷い咳き込みぶりだったが、背中をさすっている内にだんだん落ち着いていった。

「で、どうなんだ？ 根性なし」

またしても聖が突っ込んできた。悪質な毒舌は、この男が口を開く時のお決まりだ。免疫が付いた一部の者はそれとなく流せるが、ほとんどはこの毒舌に弄られ翻弄される始末だ。

「まあ………… 上手くいってますよ」

だが亮に至っては例外だ。

聖と出会ったばかりで免疫なんて無いはずなのに、どんな毒舌が降ってこようが翻弄されず、しかも真面目に返答する。外見とは裏腹に非常に温和で、生まれてこの方本気で怒ったことが無いらしい。聖の躊躇無しの毒舌にも耐えられるわけだ。

当然聖は面白くないわけで、更なる毒舌を駆使するべく口を開く。

「上手くいってる、ねえ。どこまでいったかが問題だよな？ 根性なしのことだからまだヤツちゃんないだろうが、キスぐらいはしたんだろ？」

「……………手に、触れた」

「はあ？ チキンみてーな頭してとことん根性ねえなあ、おい。今中坊でも堂々といちゃついてんだぜ。いっそのこと、中坊のカツブル適当に捕まえて、『僕、好きな子と手を繋ぐことすら出来ないチキンなんです。どうか恋愛のテクを教えてください！』って土下座して仕込んでもらえよ」

「あー、それやったら変質者として速攻捕まるから遠慮しときます」

亮はやはりあつさりと答える。聖はとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、チツと舌打ちをした。

「相変わらず面白みのねえ奴だな、てめえは。少しは反論しろよ」

「そう言われてもなあ。本当のことだし」

横で噛み合わない会話を聞きながら、燦太郎は残りのカクテルをぐいっと飲み干した。

……さすがに、そろそろ行かんとマズイわ。

「ご馳走さん」

席を立つて勘定すると、亮が目を丸くした。

「燦さん、今日は早いですね」

「ああ。明日も朝から仕事やでな」

嘘だった。明日は久々の休みだから、別に早く帰る必要は無かった。さつきまでは。

「まあ、あんま構え過ぎんと頑張りや。何かあったらいつでも相談乗ったるで」

「あ……うん。ありがとう」

また頬を赤らめる親友の背中をポンと力強く押してやり、燦太郎は店を後にした。

* * *

渋谷駅から井の頭線の電車に乗り、下北沢駅で下車する。それから三分ほど歩くと、六階建てのマンションに辿り着く。エレベーターを使って四階まで移動する。いつも通りだ。

だが、自分の部屋の鍵を開けてドアノブに手を伸ばすところで必ず躊躇ってしまう。ここ最近ずっとそうだ。開けるのが、怖くなる。

大丈夫やて、俺。

昨日かって一昨日かって、ずっと大丈夫やったやろ。

湧き上がる小さな恐怖を押し殺し、ドアノブを捻って扉を開けて中に入った。今大丈夫だって言い聞かせたばかりなのに、思わずバツと下を見る。ちゃんと子供用の女物の靴があった。

良かった。ちゃんという。

燦太郎は胸を撫で下ろすと、靴を脱いで部屋に上がった。リビングを抜けて別の部屋の前に立ち止まる。ノックをし、「起きてるか？」と尋ねた。

返事は無い。燦太郎は「開けるで」と声を掛けてからそつと扉を開いた。

扉の向こうには、何とも女の子らしい空間が広がっていた。白やベージュ、茶色を基調としたごく普通の部屋だが、ベッドにはぬいぐるみがいくつも置いてある。少々散らかってはいるが、それを除けば女の子らしく飾られた可愛い部屋だ。実際は燦太郎の部屋なのだが、今は違う。

部屋にはぬいぐるみに囲まれて眠る一人の少女がいた。ふわりと緩やかにうねる金髪のワンレングスヘアで、小学五・六年くらいと見受けられるが、どう見ても日本人じゃない。その子供らしい平和な寝顔は、目鼻立ちが整っていることもあって人形のような。

彼女の隣には、白いティンベアが一つ。彼女の胸に抱かれた、古びてぼろぼろになった白クマを見て、燦太郎は思わずほくそ笑んだ。

あんなことがあったのに、まだその白クマ抱きしめてくれるんやな。

去年のクリスマスシーズンを思い出し、思わず「ごめんな」と呟く。

謝りながら、その頬を優しく撫でた。「ごめん」って言うの、これで何度目やろうな。

あの日俺は、今まで自分も知らなかった感情を、こんな子供にぶちまけてしもうた。

好きやって。

家族としてだけでやなく、女としても見てるって。

お前がいたで、俺は前に進めたんやって。

世界で一番、愛してる
て。

今まで兄貴みたいに慕ってきた男が、いきなりあんな風にブチ切れて、さぞかし怖かったやろうなあ。当たり前や、まだ十歳の子供なんやから。

気持ち悪いって自分でも思う。二十四の男が、十歳の女の子を家族としてだけじゃなく、女としても見ているなんて。

でも気付いてしまった。いや、認めざるを得なくなってしまった。気付いたただけならまだ良い。自分の中に押し込めばいいだけの話だから。

なのに俺はしくじった。ちょっとしたきっかけで、自分を抑えられなくなった。

そんな身勝手な俺を、この子は

瞬間、瞼が熱くなった。

燦太郎は泣きそうになるのを必死に堪え、木村バー^{きむら}ジニア・モーニングの頭を撫でた。

「バーシユ、バーシユ」

頭から手を離し、肩を揺すりながら名前を呼んだ。バー^{バー}ジニアが「うん」と呆けた声を上げて瞼を開いた。目覚めたばかりの彼女が「燦ちゃん？」と声を出すには時間が掛かった。

「悪いな、寝てたの起こしてもて。せやけど、お前に見てほしいもんがあるんや。お前の喜ぶもんや。渋谷まで行かなあかで無理強いせんだけど、学校は十一日からやし大丈夫やる？」

「よろこぶ……………」

「ああ。見たら絶対喜ぶで、な？」

寝惚けた頭でどこまで話を理解したのかは分からないが、目は覚めてきているのだろう。綺麗な緑色の瞳を輝かせ始めた。

「行く！」

バー^{バー}ジニアは勢い良くベッドから立ち上がり、鼻歌を歌いながらクローゼットから上着とコート、そしてマフラーと手袋を取り出す。まるでデート前の女の子みたいやな。

「そんじゃあ行くか。眠くなったらいや。おぶつたるで」

「眠くないよ、早く行こう！ ほら早くう！」

今や眠気など完全にぶっ飛ばし、燦太郎の腕をグイグイ引っ張っていく。

大はしやぎする彼女に釣られ、燦太郎も笑みを零した。

？・日本　　東京都　渋谷にて　　（後書き）

プロローグ終了！

本編に入ります　　（　　^　　^　　）　　／

ここまでの感想とご意見、お待ちしております　　w　　w

開幕宣言

十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈ドイツノバイ

いよいよ本編です！

まずは「開幕宣言」、待降節の前の日の出来事ですww いろいろと伏線を貼ってあるのでややこしいかも(汗)

「開幕宣言」を終えたら、一区切りとしてブログの特設ページに登場人物紹介や概要の付けたしなどをやりたいと思います ヽ

それではいきます！ まずはドイツ編からww

ニュルンベルク ヘンカーシュテーク付近

旧市街の西、ペグニッツ川にヘンカーシュテークという屋根付きの木橋が架かっている。

その橋の側には、ワインハウスと呼ばれる赤い三角屋根の建物が二棟ある。昔はワイン倉庫や貧民収容所として使われていたらしいが、現在はN大の学生寮である。

セシル・シュライファーの一日は、この寮の一室から始まる。携帯のアラームが鳴り、朝日で朦朧とした意識がはつきりしていく。アラームを止め、眼鏡を外してから背伸びをした。よく眼鏡を掛けたまま寝てしまうが、寝相が良いのであまり苦に思ったことはない。

簡単に身支度を済ませると、部屋を出て朝食を食べに一階の食堂に向かった。部屋には台所があるのだから食堂なんて必要ないように思えるかもしれないが、起きたばかりで朝食を作るのは面倒くさいし、いちいち外食していたら金が掛かるということで、ここの学生ならタダで楽に食べられる食堂で朝食を済ませる者が多い。

朝食を食べると、セシルは部屋に戻らずその足で寮を後にした。

ドイツの初冬の寒さは凄まじい。十一月の半ばに入る頃には朝から道に氷が張っていて、マフラーと手袋無しでは外にも出られない。

ドイツでは初雪が降るのは大体十一月で、酷い場合は十月半ばに初雪という年もあった。今年はまだ降っていないが、現時点で道は凍っていて肌に突き刺さるような寒さだ。おそらく今日明日中には初雪が訪れることだろう。

セシルは寮のすぐ側に架かるヘンカーシュテークに足を踏み入れた。橋の周りは『首吊り役人の小橋』という意味の名前とは裏腹に、葉が枯れ落ちた木や川沿いに並ぶ木組みの建物が水面に映し出され、更に霧が掛かって幻想的な風景に仕上がっている。

冬になれば毎年目にする事が出来る、美しくて平凡な風景だ。
だが今日は、それに加えていつもと違うものを目にした。

ヘンカーシュテークのすぐ西には、マックス橋が架かっている。マックス橋の方は更に霧が濃く掛かっている。ほとんど見えない状態の
だが、セシルは視力が常人の倍以上あるので、濃い霧のその先にある一つの影を目で捉えられた。

マックス橋に、一人の少女が立っていた。赤毛を緩めの三つ編みで二つに纏めており、大人びた顔立ちに残る幼さから十代半ばと見受けられる。その綺麗な淡褐色の瞳は焦点が合っていないためか、死んだ魚を思わせる。セシルはその顔に見覚えがあった。

腕時計で時間を確認してから、少女の名を口にして呼び掛けてみた。
「マリー」

セシルの声に気が付いた少女がバツと顔を上げた。

パン工房ビーデンコルプ

地味で何の特徴もないヴァイスゲルバー小路だが、この時期だけは違った。

窓辺や玄関先がクリスマスの飾りで彩られ、可愛らしい木組みの家々をより綺麗に魅せている。だからか、この時期には不思議とヴァイスゲルバー小路を歩く観光客の数が増える。

それ以前に、待降節を目前としているこの時期には、ニルンベルクに世界中から観光客がドツと押し寄せてくる。だからヴァイスゲルバー小路に足を運ぶ者が増えるのも当然だ。

^{アドベント}待降節とは、イエス・キリストの降誕、つまりクリスマス待つ期間で、十一月三十日に最も近い日曜日（今年は十一月二十七日）からクリスマスイブまでの約四週間を指す。キリスト教の行事であり、ヨーロッパでは伝統行事として広く浸透している。

クリスマスが訪れるまでの約四週間は、あちこちの街の広場や通り

でクリスマス・マーケットという大規模な市を開き、様々な出店が立ち並ぶ。

今やヨーロッパ中で行われているが、発祥地であるドイツのクリスマス・マーケットは名が知れ渡っている。中でもニュルンベルクのは十七世紀から続く伝統的なもので、世界一有名と言われる。この時期に世界中から観光客がニュルンベルクに訪れるのはそのためだ。

そういうこともあって最近、店主のヨゼフ・クラントは大忙しだった。

いつもは近所の者や学生などが立ち寄る程度なのだが、小路を歩く人が増えると来店する客も比例して増える。とは言っても客で店内が埋め尽くされるわけではなく、客の出入りが多くなつて見慣れない顔がちらほらと見える程度だが、それでも日常に変化が起これば、毎年のことはいえ慣れるまでやり辛いものだ。

店内の振り子時計がゴーンと音を鳴らした。見ると、時計はもう正午を指していた。

忙しいと時間が過ぎるのも早いものだと思いつつも、ヨゼフはせっせと会計を済ませて客の持ってきたパンを袋に詰める作業を、慣れた動作で繰り返していた。

また店の扉が開いた。入ってきたのは、金髪に青い瞳を持つ見目の良い青年だった。名はセシル・シュライファーで、N大の国際学部の二回生。

常連というわけではないが、彼とは面識がある。彼はバイトで娘の家庭教師をしている。

レジに客がやってきたので、青年から視線を外してそっちの会計を始めた。いつもなら暇を持て余すことも度々あるのだが、客が多いので数分に一回くらいの割合で会計をしている。

数分後、セシルがレジにやってきた。いつもの通り、惣菜パンがほとんどで菓子パンはたったの一個だった。それも惣菜パンの大半はホットドックが占めている。

ヨゼフはさつさと会計を済ませ、手慣れた動作で淡々とパンを袋詰めしていく。

「入り口のテイベア、かつての想い人が作ったんですか？」

無表情を貫いていたヨゼフの顔色が変わった。思わず目を丸める。

「そんなことを話した覚えは無いぞ」

「あ、もしかして図星ですか？」

からかうような口調が勘に触り、ヨゼフは眉を顰める。

「いや、さっきマリーに会いましたね。入り口のテイベアのことを聞いてみtanですよ。前から気になっていたtanでね。あなたに聞いても、貰ったの一点張りで怒っちゃうし」

笑いながら拗ねたような声を出すセシル。そんなことで拗ねられても困るというものだ。

「そしたら分からないって言うし、お父さんに聞いてもそっぽ向いちやうって言うから、もしかしたらって思ってた聞いてみたら、ビンゴだったわけですね」

ヨゼフはますます眉を顰めた。元から無愛想面だから、眉を少し寄せただけで近寄り難い雰囲気になる。だがセシルは相変わらず人懐っこい笑みを崩さない。

「あまり大人をからかうんじゃない」

「はいはい」

差し出された手にヨゼフは一瞬戸惑ったが、すぐに商品を受け取るためだと思い立った。見ると後ろに客が並び始めている。娘の家庭教師とはいえ、いつまでも客を引き留めるわけにはいかない。ヨゼフはパンの入った袋をサツと渡した。

「お父さん、顔赤いですね。思春期の学生みたいですよ」

袋を受け取る際に指摘すると、ヨゼフが顔を更に赤くして小さく舌打ちをする。セシルはクスクスと笑いながら「それじゃあ」とだけ言って店を出た。

本当に、大人のくせにからかいやすい人だな。娘はあんなに口がよく回って面白い物言いをするというのに。

ヨゼフの赤面を思い出してプツと吹き出していると、不意に風が強くなつて頬に鋭く突き刺さった。初冬の風のあまりの冷たさに、一瞬笑うことも忘れて体を震わせる。

それにしても、かつての想い人ねえ。

セシルは顔を上げ、何気なく尋ねた単語を思い起こした。

昔のことをちよつと突かれただけで顔を真つ赤にする堅物なんだ。

そう何人も女性と付き合っていたはずが無い。あるとすればマリ―の母親と、そのかつての想い人くらいだろう。

ふと、今朝の橋の上での会話が脳裏に蘇ってきた。

「私、姉がいるかもしれないの」

「姉？」

「ええ。昨日、ちよつと暇つぶしに昔読んでた本でも見ようかと思つて倉庫を漁つてたら、本にこんなものが挟まつてて」

彼女がポケットから出した紙切れを受け取り、セシルは興味津々と目をやった。

【サンタさんへ、クラスメイトに『サンタさんなんているわけがない。あれはおとうさんなんだ』ってからかわれました。それをきいてすぐシヨックでした。

わたしのおにいさんは『めにみえないだけで、ほんとうにいるんだよ』といいます。それでもきになつておとうさんにきいてみたら、おにいさんとおなじことをいって、それから『サンタさんにきいてみようか』といいました。

どうかおしえてください。あなたはほんとうにいるのですか？

おへんじ、まっています。ジーニより 1997 9/21】

へえ、あの子の愛称と同じ名前なんだ。

偶然だろうけど、筆跡も何となく似てる気がする。

「それと、これ」

彼女がポケットからまた二枚紙切れを出した。一枚は手紙、もう一枚は写真のようだ。

写真には、生まれてまだ数か月の金髪の赤ん坊が映っていた。すやすやと気持ち良さそうな顔で眠っている。写真から視線をずらし、今度は手紙の方に目を通す。

【明日、ドイツを発ちます。もう二度と会いません。

せめて、この子の写真だけでも納めておいてください。私に出来ることはこれだけです。

ごめんなさい。そして、さようなら 1992 2 / 15】

名前は記載されていないが、おそらく『かつての想い人』といったところだろう。

詳しい事情は分からないが、振られたということは確かだ。

「多分ね、最初に見せた手紙……………」

言いくいのだろう。彼女がまた言葉を濁したので、セシルが言葉を補うことにした。

「その赤ん坊なんだろうね。そして、手紙からして女の子だと思うよ。1997年に小学生だったことは、今頃はもう大人だろうね。僕とは年が近いんじゃないかな」

憶測を淡々と述べたら、彼女は完全に無言になった。まあ無理もない。父親に、自分以外にも子供がいるかもしれないのだ。さぞかし戸惑っていることだろう。

だが、これは家族の問題だ。他人の僕がこれ以上関わったところで傷を増やすだけ。胸の憂いのはけ口としてだけ機能すればいい。

「目つむってるけど、可愛いじゃん。きっと今頃美人になってるだろうね」

ここから先は話を別の方に持っていく、深入りはしないことにした

のだった。

ギムナジウム とある教室にて

ドイツでは、十歳で義務教育を修了する。

子供達は担任の先生や保護者などと話し合った末に、専門学校や上級専門学校を目指す実科学校レアルシューレや、職人や販売員などを目指す基幹学校ハウフトシューレと、様々な進路に分かれる。そして、その内の一つがギムナジウムに進学する道である。

ギムナジウムとは、大学進学を目指す子供達が進学する八年制の学校である。いわゆる中高一貫教育で、ドイツに限らずヨーロッパに広く浸透している。

ローゼマリー・クランツは今、そのギムナジウムの教室で世界史の授業を受けている。

だが授業に耳を傾ける一方で、ローゼマリーは今朝の出来事を頭の中で思い描いていた。

早朝、父に『今日は朝補習があるから』と嘘を付いて早めに家を出た。

とはいえ、実際には朝補習などないし、学校に着いたところで教室には誰もいない。どうしたものかと考えながら、何となく学校とは正反対の道を選んでマックス橋に立ち寄った。

うわ、凄い霧。

今朝は酷い寒さで、それを主張するかのように霧が濃く掛かっている。最早向こう側の景色など見えたものじゃない。木々や川も霧で覆われてぼんやりとしか見えず、いつも通る橋なのに、立ち止まって眺めていると異世界に迷い込んだかのような妙な気分になる。

今の私の心も、景色に例えればこんな感じかもしれない。

「マリー」

霧を払うような大声が、前方から耳に突き刺さった。思わずバツと顔を上げる。霧が掛かっていて姿はよく見えないが、聞き覚えのある声だった。

「先生……？」

「ごめん。そっちは見えないよね。ちょっと待ってて、今そっち行くから」

右往左往している内にどんどん足音が近づき、やがて人影が霧の向こうから現れた。綺麗な金髪と青い瞳を持つ男で、やはり自分の知っているシュライファー先生だった。

「やほー」

待ち合わせ場所で友達を見掛けたかのように、片手を上げて満面の笑みを見せている。

「どうしたの？ こっちは学校とは正反対でしょう？」

図星を突かれて、ローゼマリーは唇を少し尖らせた。その様子を見たセシルが、何が可笑しいのか軽く笑い声を上げた。

「図星を突かれると唇を尖らせる癖、お父さんと同じだね」

「そんなことないよ」

「いいや。傍から見ても、君はお父さんにそっくりだよ」

「そっ、かな………」

セシルの台詞で、何故か昨夜の出来事を思い出した。出来事というほどのものではないが、どうしてもあの写真と手紙が頭から離れないのだ。

ローゼマリーが言葉を濁すと、セシルは食い付くようにまた問い掛けてきた。

「何かあった？ 良かったら話してみない？」

突如の発言に、ローゼマリーは目を丸めた。

「ああ、深く考え込まなくていいよ。君の事情を誰かに言い触らすつもりは無いからさ。言い触らしたところで、俺にとっては何の得にもならないし」

「じゃあ、得になるなら言い触らすの？」

こっちは真剣に悩んでいるのに。そう思うと少し腹が立って思わず強い口調になっていた。感情的になると、癖でこうやって理屈的な物言いをしてしまう。

そしてセシルの方は少しも動じた様子を見せず、逆に楽しそうに笑った。

「そういうところだけはお父さんと正反対だ。君はお父さんと違って、理屈をこねられる器用さがある。でも、君の物言いは嫌いじゃないよ。実に面白い」

褒められているのか貶されているのか分からない発言に戸惑っていると、セシルがまた口を開いた。本当に、この人の口はよく動く。よくそんなに言葉が次々と溢れてくるものだ。

「特になること自体思い浮かばないから、何とも言えないな。その時の気分に寄るかもね」

気分で言い触らされては堪らないと思いつつ、自分の事情を知って得をする人などいるわけがないと確信していた。知ったところで、憂鬱な気分になるだけだ。

それなのにこの人は話してほしいと言う。前々から思ってたけど、やっぱり変わった人だ。

「話したって、何にもならないと思うけど」

「ああ、そうさ。僕はただの野次馬だから、君の苦しみを拭い去るような力はない。でも、野次馬つてのは深いことなんか考えない。その時の気分で興味を持つだけだ。だからその内、気まぐれで聞いたことなんか頭の隅に追いやって忘れるよ。どうせ忘れて鮮明には残らないんだから、知られたところで君の懐は痛まないはずだ」

「そう、かな」

「うん。だったら目の前にいる野次馬にでも愚痴って、ちよつとでも気分を晴らすのもいいんじゃない？ 要するに、ストレス解消ってこと」

ローゼマリーはセシルの言葉一つ一つを頭の中で繰り返しながら、

少し考え込んだ。

何でだろう。けして解決法にはならないのに、この人が喋ると妙に説得力がある。丸め込まれるってこんな感じだろうか。

この笑顔を絶やさないう青年に丸め込む気があったのかは分からない。

「私

」

だけど結果的に、ローゼマリーは上手く丸め込まれる形で昨日のことを全て話した。

話したところで何の解決にもならなかった。顔色を窺いながら躊躇いがちに話す私に、あの人は終始相槌を打ち、手紙や写真を興味津々と眺めるだけだった。

でもその代わりに、彼は余計な世話を焼くことも説教をすることもなく、私の話を静かに聞いていた。それも笑顔で楽しそうに。

だからだろうか。次第に話すことへの抵抗感が薄れていって、気が付いた頃には順調に胸の内を晴らしていた。単に誰かに話したただけなのだが、それだけでも気が楽になった。

私には姉がいるのかもしれない。それも別の人の血が流れる姉が。父が昔、お母さん以外の女の人と関係を持ったのかもしれない。でも、別にいい。それは過去のことだ。

知ったからって、この生活が変化するわけじゃないんだから。

ふと窓の外を眺める。薄暗くなつて光を灯し出した街に、ひらひらと初雪が降り始めた。

早朝から街を覆っていた濃い霧は、もうすっかり消え去っていた。

ハウプトマルクト
中央広場

今年初の雪が舞い落ちてくる中、街の中心部である中央広場はいつもの賑わいに更に輪を掛けて賑わっていた。午前中に、広場にある

全ての屋台が開店したからである。

街中に屋台が立ち並び、あちこちで人の群れがドツと流れている。中央広場に至っては屋台のテントと無数の人で埋め尽くされている。更に街全体がイルミネーションや屋台の電灯によって暖かい光に包まれ、まだ一か月先なのにすっかりクリスマスの世界と化していた。綺麗……。

レイラ・ヴィーンは素直にそう感じながら、恋人の姿を探しつつ辺りを見回していた。周りは人で埋めつくされており、セシルの姿を探すのはかなり困難な状態だ。その上、混雑がひどくて、ずっと歩いているとだんだん疲れてくる。

だけど何でだろう。人混みは嫌いなのに、疲れるのに、こうして探し回るのが楽しい。

疲れる体に反し、レイラの心はドキドキと踊っていた。

店がずらりと並び、綺麗な飾りやイルミネーションで辺が彩られ、大勢の人で賑わって混雑している。確か、セシルと出会ったのもこんな夜だった。

彼と出会ったのは、今年の庭園祭の夜だった。

N大には毎年六月から七月に『シュロス・ガルテン・フェストお城の庭園祭』という大規模な祝祭がある。

ニュルンベルクの北の岩山に建つカイザーベルク城の庭園が会場となり、多くの催し物が出される他、大規模な舞踏所が設けられる。参加者は毎年六千人に上り、経済界や政界の大物なども大勢訪れることもあって、バイエルン州の大学行事では最大イベントとされている。

当然、普段は勉強に明け暮れる学生たちもその日はお祭り気分で、日頃の苦勞や憂さを晴らすように一日中大騒ぎし、舞踏会の雰囲気
に酔う者ばかりだ。日が暮れても祭の火照りは覚めず、それどころか更に盛り上がっていくのである。

レイラはそういった賑わいから離れ、城の側を流れる川のほとりで一人佇んでいた。

休憩所も各所に設けられているが、そこにも人が大勢集まっている。無益な人付き合いを好まない彼女としては、誰もいない静かな場所で休みたかったので、休憩所は極力避けてわざわざ川のほとりまで来たのだった。

……………疲れた。

ふう、とため息を零しながら心の中で呟いた。

卒業生で先生受けが良かったこともあり、レイラは毎年この庭園祭に招待される。付き合いがあるので参加はするものの、正直あまり気乗りしない。人混みが嫌いなレイラとしては、当事者でもないのにこういった賑わいに飛び込むのは時間の無駄でしかなかった。

だから、長時間こんな人混みの中にいると苛々してくるものだ。そこで、友人同士の会話が延々と続く中、タイミングを図って一人になって今に至る。さつきまで喧騒の中にいたから、川のせせらぎと夜風が心地良い。

もう少し休んだら、帰ろうかな。これ以上いたって何もならないし。そう思いながら静寂に身を沈めていた時だった。

「ねえ」

不意に後ろから声が掛かり、レイラは思わず肩を震わせた。反射的にバツと振り返る。

少し離れた所に、青年が立っていた。青年とはいってもまだ少年らしさが残っているの、かなり年下だろう。

「隣、いいかな？」

レイラは戸惑いながら、とりあえず首を縦に振った。それを見た青年は、困惑するレイラなどお構いなしに歩み寄り、隣に腰を下ろした。

一人で休みたかったのに……………。

内心で不満を呟きつつ、隣に座る青年を見た。

見事な金髪に澄んだ青い瞳で、男にあまり関心の無いレイラでも、素直に綺麗だなんて思えた。その綺麗な顔に浮かべる柔らかない笑みは、板に付いている感じがする。

「せっかくの庭園祭だつてのに、こんな所で何してんの？」

突然の質問に、レイラは眉を顰めた。今となつては単にそう思つて聞いただけだと思うのだが、この時は何だか馬鹿にされたような気がしてならなかった。

「そういうあなたこそ、こんな所まで何しに来たのよ」

「人に聞く前に、まずはこっちの質問に答えてほしいな」

笑顔であつさり言いのけられ、レイラは肩を縮めた。この青年の言つてゐることは正しい。何一つ間違ひはない。腹立たしかったが、言い返すことは出来なかった。渋々と質問に答える。

「休憩しているのよ」

思わず声に怒気が籠つてしまった。今思えばかなり疲れていて、不機嫌だったのだろう。それを察したのか、青年は少し目を丸めた。

「ああ、何だ。休憩してるだけか。いやあ、ごめんね」

「何が？」

突然謝られて訳が分からなかった。しかも謝りながらも、柔らかな笑みを絶やしていない。

「『せっかくの庭園祭だつてのに』って言つただろう？ 聞き方が悪かつたかなつて。不貞腐れているように見えたからさ、てつきり何らか事情があるのかと思つてね。せっかくの庭園祭なんだから機嫌直そうよつて意味だったんだけど、余計期限損ねた？」

拍子抜けてしまった。これまでに相手の物言いで腹を立てたことは何回もあるけど、まさかそれを謝られるなんて思つてもいなかったのだ。

もしかして、結構相手の表情とか伺つて話す人なのかしら。

そう思うと、不思議と苛立ちが消えていった。

「うつん、大丈夫。気にしないで。それで、あなたの方は何しに来

たの？」

「頭を冷やしにきた」

「え？」

可笑しな物言いに思わず声を上げる。

「人混みの中って、暑いだろう？　好きなんだけど、ちょっと暑くなりすぎたからさ」

「なるほど」

青年の説明であっさりと納得した。文字通りの意味だったわけだ。

その後、しばらく青年と話をした。突拍子も無いことを言うかと思えば、こつちを氣遣う言動もちらちらと伺える。だからだろうか。話していて苦にならない。

不思議なことに、彼と話している間は一人になりたいと一度も思わなかった。

お互い、意気投合したという意識があったのだろう。それからというものの、休みの日などに時折会うようになった。無益な人付き合いは好まないはずなのに、彼との会話は心から楽しめるのだ。レイラは、会う度にセシル・シュライファーという人間に惹かれていった。そして、時が経つにつれて次第に恋人同士という関係になっていったのだ。

セシルとの出会いを思い出し、レイラは一人ほくそ笑んだ。大嫌いな人混みの中にいるはずなのに、ピクニックの前の子供みたいに胸が弾んで仕方ない。

クリスマス・マーケットも、庭園祭と同じように今までは別にどうでもいいイベントだったはず。それどころか、クリスマス・マーケットで喜んでいたのは幼少の頃くらいだった。

でも何故だろう。『恋人』という存在が出来た、それだけでこんなにも楽しい。

これが恋というものののかしら？　だとしたら、何て単純な。

でも、もつと味わっていたい。この胸の高鳴りは、自然とそう思わせるほど心地良い。

そうやって胸を高鳴らせながらしばらく人混みを歩いた。屋台が並び通りを抜け、広い通りを出たところで、ようやく彼の姿を発見した。

セシルは、中央広場にそびえ立つ『美しい泉』の石盤に腰を下ろしていた。

美しい泉というのは、高さ十九メートルの豪華な黄金の塔で、選帝侯や中世の英雄の像などで飾られている。この塔を囲む鉄柵には仕掛けが施されており、『周りの柵にはめ込まれた金色の輪を、三回転させる間に願い事を言うと言う』という伝説が残っている。

クリスマス・マーケットの時にはこの塔の周りにも人が集まってくる。塔の下石盤は休むのに丁度良いということで、人混みに疲れた者や待ち合わせをする者で溢れ返っていた。

ふと塔の周りに列を作って並ぶ数人の子供が目に入る。多分、金色の輪を探すためだ。

大人達は遊び心で、あるいはおまじないで輪を回す。それも大半は恋人達が占める。だが小さい子供などは純粋に伝説を信じ、鉄柵にはめられた小さな輪を探して回す。

そういえば僕も子供の頃、願い事を叶えたくてあの子と一緒に探したな。

昔はアメリカに住んでいて、時々父の故郷であるこの街に遊びに来た。その度に輪を探そうと塔に立ち寄ったけど、地元の人間じゃないからどこにあるか分からなくて苦労した。

それでも願い事を叶えたくて必死に探した。この街で育った父が度々教えようとしてくれたけど、二人で探すのって意固地になっただけ。結局見つけられなかったけど。

もしあの時、素直に教えてもらって、願い事をしていたら今と違う未来だったかな。

『ずっとみんなが仲良しで、そしてジニーと一緒に幸せになれますように』

「セシル」

不意に耳元に声が掛かる。セシルは軽く驚きつつも、後ろを振り返った。

「どうしたの？　ぼおつとして。こんなに近づいてるのに気付かないなんて」

いつの間にか真後ろにしゃがみ込んでいたのは、数か月ほど前に付き合い始めたばかりの恋人だった。にこりと今日も綺麗な笑みを浮かべている。

「ああ、ちよつと子供の頃を思い出してたんだ」

「どんなこと？」

レイラは立ち上がり、セシルの隣に腰掛けながら尋ねた。

「この塔の伝説。小さい頃に願い事を叶えたくて輪を探したこと、君にもあるだろう？」

「あつたんでしょね。でも全く覚えてないわ。かなり現実的な子供だったから、他の子が探しているのを見て『馬鹿じゃないの』って思ったのはよく覚えてるけどね」

「うわっ、可愛げない子供だなあ。まあ君らしいけど」

子供らしくない昔話を懐かしそうに語るものだから、セシルは思わず苦笑した。

ん？

だがその時だった。レイラの背中越しにあるものを目にし、セシルはじっと見つめた。

塔の側にある聖セルバドウス教会から覗く、何やら怪しげな視線だった。セシルはその執拗な視線に見覚えがあった。今に限ったことじゃない。あの日、とんでもない視力を得て以来、度々感じていた視線だ。

直接は見たことないけど、確かにいる。

色も形も捉えられないが、確かに存在する。この目でなら「セシル？」

日頃から笑みを絶やさないセシルが突然真顔になったからか、レイラが疑問の声を上げる。

だが今は恋人の声に構わず、更に目を凝らして見つめた。「どうしたの？」

そいつの視線は、自分だけでなくレイラにも向いていた。

へえ、驚いたな。

てつきり、僕だけかと思っていたんだけど……………。

「レイラ、今日は君の部屋に泊まってもいい？」

再び笑みを作って尋ねる。唐突なお願いをしたからか、レイラは「え？」目を丸めた。

「寮の方は大丈夫なの？」

「許可は取ってあるよ。明日から連休に入るから、外出する人多いし。それとも迷惑かな？」

顔を覗き込んで尋ねてみる。案の定、レイラは破顔して頬を赤く染めていた。普段はしっかりとした大人の女性なのに、こういうところに少女の名残があって可愛い。

「嬉しい」

「それじゃあ決まり」

本人の許可が出たところで、セシルはふと人の群れがこの中央広場

へぞろぞろと集まってくるのを目にした。一般人のみならずマスコミやテレビ局のカメラなどの姿もあり、フラウエン教会前に並ぶ屋台の上に建てられたスペースで待機している。

やがて、司会者の男がフラウエン教会のステージに上がってきた。それを合図に、スツとそこら中の灯りが消え始めた。ステージの照明以外、屋台の電気もイルミネーションも、美しい泉のライトアップも何もかも。辺りはすっかり暗闇に包まれ、おかげでレイラの顔が見えにくくなった。それでも超人的な視力によって、どんな表情をしているかくらいは判別出来る。

会場から消えゆく灯りと同じく、人々の賑わいも波のようにサツと静まりかえる。数分後には、耳が痛いほどの静寂が会場全体を包み込んだ。

「皆さん、今年も無事クリスマス・マーケットの日を迎えられました」

たった一人照明に照らされる中、司会者は簡単に挨拶の言葉を述べ始めた。司会者の声がマイクを通し、静まり返った会場全体に響き渡る。

「それでは、いよいよクリストキントの登場です！」

盛り上げる一声を最後に、司会者は照明の光から外れて暗闇に紛れた。照明は司会者に代わり、ステージに姿を現すクリストキントへと当てられる。純白と金色が絶妙に組み合わさった煌びやかな衣装を身にまとった十代の少女だ。

クリストキントとは天使の姿をした、幼子のキリストである。ドイツには様々な種類のサンタクロースがいて、ニルンベルクではクリストキントがそれに値する。毎年クリスマス・マーケットの屋台が開店した数時間後、日が沈んだばかりのこの時間にクリストキントに扮した少女がフラウエン教会のステージに上がり、クリスマス・マーケットの開幕を宣言する。

その瞬間を捉えようと、上下左右からフラッシュの音が続出し始める。

パツとステージを照らす照明が増えた。クリストキントの左右には、いつの間にか金色の羽の天使に扮した二人の少女や、金管楽器を持った男達が立ち並んでいた。更に観客達の周りにもライトが照らされる。そこには純白の天使の衣装を着た大勢の子供達が控えている。ついに、クリストキントが口を開いた。挨拶の言葉を述べ、微笑みを浮かべている。二年に一度のコンテストでニルンベルクの象徴であるクリストキントに選ばれるだけあって、まだ十代の少女にも関わらず堂々としており、女神のような慈しみを感じられる。

「これより、2011年度のクリスマス・マーケットの開幕を宣言します！」

開幕宣言と共にクリストキントの両手が広げられ、腕から垂れ下がる金色の袖が煌びやかに揺れ動く。そしてクリストキントがゆつくりと両腕を閉じた瞬間、嵐のような拍手と口笛が会場を包み込んだ。金管楽器による演奏が始まり、純白の天使達の合唱が会場全体に響き渡っていく。合唱が始まると、人々の大歓声は静かに止んでいた。

「私ね」

ふとレイラが、オープニングを眺めながら呟く。セシルは「ん？」と聞き返した。

「生まれて初めてなの。こうして誰かとクリスマス・マーケットに来るの」

「へえ」

家族ともないのかと聞いてみたいところだが、ここでは止めておいた。毎年恒例の祝祭に誰かと来るのが生まれて初めてだと言うのだ。少なくとも良い思い出が口から出ることは無いだろう。オープニングの酔いに浸っているレイラに、それを無理に語らせようとは思わ

ない。

「何でかな。毎年見てるのに、今年のクリストキントは特別綺麗に見える」

「確かに今年のクリストキントはかなりの美人だと思うけど、僕は君の方が綺麗だと思うな」

わざとおどけてみると、案の定レイラは「もうっ」と少しだけ声を荒げた。

「こうして一緒に並んで座っていると、物の見え方まで違ってくるってことよ」

穏やかな声で糸を紡ぎ出すように話すレイラの頬には、はつきりとは見えないものの赤みがほんのりと残っている。

「楽しい？」

「うん。とっても楽しい」

幸せそうに笑う彼女に釣られて、セシルも思わず笑みを浮かべた。

自分でも驚くほど、珍しく心からの笑顔だった。

「それは良かった」

しばらくの間、二人は暗闇の中でオープニングセレモニーを静かに眺めていた。

N 大学生寮 ワインハウス

屋台を二時間ほど回った後、レイラのマンションに向かうことになったのだが、ふと用を思い出し、セシルは一度寮に戻った。正面玄関の側にあるポストを確認するための。

「ちょっと待ってて。すぐ戻ってくるから」

レイラにはそう言って正面玄関の前に立たせてから中へと入った。玄関のすぐ側のポストの扉を開く。何も入ってなかった。

今日も、来てないか。

セシルはふうと溜め息を付き、空洞ばかりが広がるポストの扉を閉

めた。

明日、母から手紙が来なくなっただろうどーか月になる。彼女はまめな性格で、月に一・二度の割合と、頻繁に手紙を出していた。それが約一か月前から何の音沙汰もない。明らかにおかしいし、何より毎月届く手紙を楽しみにしていたセシルとしては面白くない。しかも、メールも電話も繋がらないんだよな。

その上、今まで頻繁に届いていた手紙が一月も無いと、何かあったのではないだろうかと考えてしまうものだ。

明日も来なかったら、あっちの方に電話を掛けてみるか。

セシルはポストに背を向け、正面玄関を出た。確認している間、少し目を離していたので心配になったが、レイラは五体満足だった。

……………あれ？

何故か神妙な顔をするレイラ。とりあえず「お待たせ」の一言と共に笑みを見せた。

「大丈夫？」

「何が？」

「ポストを開いた時、少し悲しそうな顔してたわよ。誰かからの手紙を待つてるの？」

ああ、そういうことか。

心配そうに顔を覗き込んでくるレイラに、セシルは「まあね」とだけ答え、それ以上は何も言わなかった。彼女も追求することなく、ただ「そう」と同調してくれた。

「手紙、早く来るといいわね」

それに加え、この年上の彼女は優しい笑みを浮かべて暖かい言葉を掛けてきた。

「うん」

そんなに落ち込んで見えたのかなと思いつつも、内心では凄く嬉しかった。

開幕宣言

十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

ドイツノバ

次はアメリカ編ですWW

開幕宣言

十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

へアメリカノ

開幕宣言のアメリカ編ですww

やっぱ伏線引きまくりです。後でちゃんと繋げんと大変なことになりそう(; _ ;)

マンハッタン ダウンタウン 某アパート付近

ジリリりと、けたたましい目覚まし時計のアラームが鳴り響く。

レオン・エヴァンスは眉を顰めて「うう」と唸り声を上げた。掛け布団に頭を潜り込ませたが、耳を劈く騒音に耐えかねず、仕方なく体を引きずるように起こしてアラームを止めた。

アラーム、止めとくの忘れた。

これ以上鳴らないようにアラームを切りながら、寝惚けた頭でぼんやりと気が付いた。

もうこの時間には起きる必要ないのだから。

レオンは溜め息を吐きながら、再びごろんと仰向けに倒れ込んだ。

『君、明日からもう来なくていいから』

店のマスターにそう言い放たれたのは、昨日のライブの後だった。

『そんな、いきなりそんなこと言われても……』

『君は確かに感性もテクニクもあるし、安定した聴きやすい音を出せる』

『では何故?』

『君には光るものが全く無いし、可能性も感じられない。君のライブの時に来る客の数が何よりの証拠だ』

淡々とした台詞だったが、レオンにはこれ以上ないくらい衝撃の強い言葉だった。

『そんなことは、プロのジャズピアニストなら誰にだって出来るからだよ』

鮮明に思い出してしまい、レオンは苛ついて舌打ちをした。

口くなものが無かった。食べてもせいぜい、おやつにしかならない。
「……買い溜めしとくの、忘れてた」

この時間から開いてるスーパーって無いよな。この辺りだと、セブ
ンイレブンくらいか。

レオンは洗面所に行つて軽く顔を洗うと、財布を手にして上着とマ
フラーを身にまとい、戸締りをしてから部屋を出た。

十一月の下旬にもなると、まだ雪は降っていないものの、本格的に
冬へと突入する。空気の冷たさは白い息がはつきりと見えるほどで、
もはや肌寒いというレベルではない。

寒さに凍えながらも、近くのコンビニまで慣れた足取りで歩いた。
中に入つて寒さを逃れたところでパンのコーナーに向かった。

入り口には赤い靴を模つたお菓子の詰め合わせや、赤鼻のトナカイ
のぬいぐるみ、パーティーグッズなど、クリスマスに備えたグッズ
が固めて置いてあるけど、生憎レオンは大の大人の上に扶養する家
族もいないので必要無い。

買い溜めするには品数が少ない上に値段が高い。だがこの時間はス
ーパーなど開いていないし、とりあえず今は腹ごしらえさえ出来れ
ばいい。

レオンは適当に惣菜パンをいくつか選び、レジに持つていった。店
員は見慣れない顔の大人しそうな少女だった。高校生のバイトなの
だろう。

「い、いい、いらつしやいませ」

声があからさまに震えていた。声だけじゃない。商品を手に取り、
バーコードをスキャンする動作の一つ一つが非常にぎこちない。緊
張しているのは一目瞭然だった。おそらく、昨日今日入ったばかり
のバイトなのだろう。

「ご、合計、三ドル十セントになります」

財布から三ドルと二十五セント出す。料金を受け取る際も手が震え
ていて、案の定取り落しそうになる。ここまできると見ていて哀れ
になってくる。

「じゅ、十五セントのおつりになります」

差し出されたおつりを何気なく受け取ろうとする。

だが、受け取る前に小銭が震える少女の手から零れ、コロコロとレジの下まで転がった。バイトの少女は慌ててレジから出てきて即座に拾い始めた。レオンもその場にしゃがんで一緒に小銭を拾う。後ろに客が並んでなくて良かったと本当に思う。

「あの、大丈夫ですか？」

あまりにも哀れで、拾いながら思わず声を掛けてしまった。

だが、本人は失態を犯したことで頭がいっぱいで反応を返す余裕が無いらしい。「申し訳ありませんっ」をひたすら繰り返しながら、拾った小銭をご丁寧に両手で差し出してきた。

その後、少女は相変わらず緊張していたが、これといったトラブルは無かった。バイトの少女が袋に商品を詰めて差し出し、それを受け取る。

「あ、ありがとうございました」

そうして何事も無くセブイレブンを出て歩き出した。その数秒後だった。

ざわざわ、と何やら後ろが騒がしくなってきたことに気付いた。何事だと立ち止まって振り返った。同時に悲鳴と発砲音が耳に入る。更にその後、怒鳴り声も耳に飛び込んできた。

「騒ぐんじゃねえ！」

コンビニの周りにはいつの間にか人だかりが出来ていた。何が起ったのか気になってレオンも人だかりの中に混じる。そして思わず「あっ」と声を上げた。

レオンが目にしたのは、サングラスを掛けてニット帽を被った小太りの男が拳銃を取り出し、怒鳴り散らしながらあのバイトの少女に銃口を向ける場面だった。

バン バン

天井に風穴が二つ開き、発砲した拳銃の口からは細長い硝煙が漂う。

「騒ぐんじゃねえ！」

今の銃声と男の怒鳴り声で、悲鳴が上がっていた店内が静まり返った。

「全員、そこから動かず手を上げる！」

男が銃を四方八方に向けると、人々は即座に言われた通りに両手を上げた。

エミリ・アンダーソンもまた然りだった。だがバイトである彼女には、それに加えて店員としての責任感が重く押し掛かってくる。

どうしよう、通報しなきゃ。

でも、怖い。体が動かない。

恐怖で頭を真っ白にしている間に、とうとう銃口がレジの店員であるエミリに向いた。

「おい、金を出せ」

「……え？」

「早くしろ！」

頭越しに怒鳴られ、エミリは思わず「は、はいっ」と返事をしてしまった。頭では通報しなきゃと思っているのに、手は死の恐怖から逃れようとレジへと伸ばしてしまう。

「ガッ！」

ガンと何かがぶつかる音と共に、男の呻き声が上がる。

後ろ頭を押さえてうずくまる男の足元に、分厚い雑誌がドンと音を

立てて落ちた。

「つてえ……………」

男が頭を摩りながら後ろを振り返る。店内の客やエミリの視線も同じところに集中した。

エミリは驚きのあまりに目を見開いた。

人々の視線を集めているのは、雑誌のコーナーに立つ中学生くらいの少年だった。初冬にしては軽い服装をしたその少年はただ一人手を上げることが放棄し、男にガンを飛ばしている。

「てめえ、何しやがる！」

男は逆上し、銃口をエミリから少年へと向き替えた。だが少年は少しも動じない。それがエミリの不安を更に駆りたてた。

茶髪のショートカットに琥珀色の瞳をしたその少年は、エミリの弟なのだから。

「ジェイミー、駄目！」

エミリはこれまでに無いくらい大声を出した。声が掠れて悲鳴のようになっている。

「逃げて！ 早くにげ」

「うつせーよ」

ジェイミー・アンダーソンのはつきりとした声が、姉のエミリの悲鳴を遮った。

「つたく、馬鹿姉貴が。こんな玩具突き付けられたくらいで何ビビつてんだよ」

「ああ？」

ジェイミーの発言に声を荒げたのは、銃をかざす男の方だった。

「おいガキ、これで天井に穴開けたの見ただろーが。てめえの目は節穴か？ ええ？」

だがジェイミーは臆することなく、それどころか平然と歩き出した。「ハッ、それはこっちの台詞だ。大間抜け野郎が。間抜けもここま

でくると哀れになつてくるぜ。その豚みてーな体同様、脳味噌も豚並みなんじゃねーのか？」

淡々と語る間も、ジェイミーの足は一步一步、確実に男へと近づいていく。

「ああん？」

「いや、豚並みじゃあ豚が可哀相だな。てめえは豚以下だ」

「このクソガキ！ これ以上近づくんじゃねえ！ マジでぶっ放^{ばな}」

「興奮するあまりに、自分で安全装置掛けたことにも気付いてねえつつてんだよ」

ジェイミーは足を止めると同時に、はつきりとそう断言した。

店内に、沈黙が訪れる。

「……………え？」

これまで怒鳴り散らしていた男は言葉を失い、慌てて己が手にしている拳銃を見下ろした。

ズガアッ

突如、脳天に強烈な雷が落ちた。何が起こったのか理解する間もなく、男はその場で意識を飛ばし、仰向けに倒れ込んだ。

「ふん、呆気ねえ。豚どころかゴキブリ以下だな」

一方、店内の人々及び店の入り口に集まる人々が目にしたのは、何とも大胆な場面だった。

男が手元に目を向けたその一瞬に、ジェイミーが素早く足を振り上げて男の脳天に思いつきり踵を落としたのだった。

「^{リボルバー}拳銃に安全装置が付いてるわけねーだろ、ばーか」

ジェイミーは罵倒しながら、気絶している男の横腹を蹴り上げた。

最後に軽蔑の眼差しをくれてやると、バツと顔を上げてレジに立つ姉を見た。エミリは未だに頭を真っ白にしているようで、呆然と人形のように固まっている。

「おい、何ボサツとしてんだ。警察」

「あ、う、うん」

ジェイミーが声を張り上げたことで、エミリがハツと我に返る。狼狽しながらも、今の状況を呑み込んで電話へと手を伸ばす。

だが通報する前に、パトカーのサイレンが耳に入った。

当然、あの状況で店内の人間が通報などする余裕などあるはずがない。ジェイミーは外の人だまりに一瞥をくれた。

「ふーん。野次馬も役に立つもんだな」

「野次馬だなんて、そんなこと言ったら駄目よ。通報してくれた人に失礼じゃない」

説教し出した姉に、ジェイミーは「本当のことだろ」と悪態を付きながら眉を顰めた。

「でも、ありがとう。ごめんね、こんな危ない目に合わせちゃって」だが説教をする一方で、感謝と謝罪の言葉を一度に口にするエミリ。

「……危ねえのはどっちだよ。ったく」

「そうだね。ごめん」

困ったような笑顔を浮かべる姉を見て、ジェイミーは不機嫌そうにそっぽ向いた。

レオンは携帯を閉じ、ふうと息を付いた。

とりあえず、出来ることはした。後は警察が駆けつけてくれるのを待つだけだ。

良い年をした大の男が神頼みというのも気が引けるが、だからといって凡人の自分に中に入って強盗を抑え込む度胸も力も無い。周りの人々と同様、ただ奇跡を祈ってあの少年と強盗犯の駆け引きを見

守っているだけである。

だが、このまま見ているだけというのは気が済まなかった。トラブルの上だったとはいえ、ついさっき口を利いたばかりの少女の命が危険に晒されていると分かると、どうも無視することが出来なかったのだ。

レオンは携帯をポケットに仕舞うと、再びコンビニ内の駆け引きに目をやった。

す、すげえ……………。

レオンの目に、拳銃を持つ男相手に臆することなく着々と距離を取る軽装の少年が映る。ガラス越しの上にこの人混みの中なので喋っている内容は聞き取れないが、それでも少年が口を開く度に男が血相を変えて叫んでいるのは明らかだ。

少年は一步一步、確実に男へと近づいていく。そして男の目前で足を止めると同時に、余裕の笑みを浮かべながら何らかの言葉を口にした。男が顔を真っ青にし、手元に視線を落とす。

その隙に少年が脚を振り上げ、渾身の力で踵を男の脳天目掛けて落とした。

体格の差は歴然としたものだったが、体格の勝る男の方が白目を向いて倒れ込んだ。

あれ、本当に子供なのか？

手ぶらだというのに大人の男、それも拳銃を持った相手に臆することなく歩み寄って、しかも一瞬で勝負を付けてしまったのだ。まるでアクション映画のワンシーンを見ているかのような気分だった。

やがてパトカーのサイレンと共に警察がコンビニへと駆け込み、未だに気絶し続ける男に手錠を掛けて引きずっていった。

警察が来たなら、もう大丈夫だろう。

他人事ながらも一安心し、この場を立ち去ろうと歩き出した。

うわぁ……………。

人混みの中に、一人の男がいた。四十代半ばと見受けられるその男は、周りの人々よりも明らかに線の細い顔立ちで、黒い瞳をしている。そう、彼は日本人だった。

渡米早々、えらいもん見てしもうたなあ。

幼さの残る少年が、銃をかざす大男を足の一振りで決めるといって、アクションスターも顔負けの現場を目の当たりにしてしまったのだ。いきなり、こんな映画みたいなシーンを生で見れるとは思わなかったわ。さすが、ニューヨークといったところか。

気絶する強盗犯を警察が引きずっていく姿を呆然と眺めていた男だったが、しばらくすると当初の目的を思い出し、ハッと顔を上げる。こんなところで油売つとる場合やない。一刻も早く、探し出さんと男は体を翻し、早足でコンビ二を去っていった。

それにしても、こつちもすっかりクリスマス色やなあ。

あちこちの店舗やビルにクリスマスの飾りが施され、店頭の品物もクリスマスに備えたものが出回っている。クリスマスツリーも、歩いているといくつも見かける。

街中のクリスマスの飾りに関心を示しながらも、男の頭の中はクリスマスどころではなかった。目的を果たすために、あちこちを見回しながらひたすら歩き続ける。

しばらくして、男はある場所で立ち止まった。そしてゆっくりと顔を上げる。

男の目の前には、巨大な噴水があった。今はクリスマス一か月前とということもあって、クリスマスのイルミネーションで鮮やかになっている。飾りだけでもこんなに存在感があるのだから、夜になって光を灯し出したらさぞかし美しいだろう。

ただ何故だろう。こんなにも美しいのに、噴水から流れる水の音を聞いていると、何でか胸を締め付けられる。

男は、自分でも気づかない内に顔を歪めていた。今にも泣きそうな顔だった。

一体どこにいるんや。

はよ帰ってこんど、その内ジニーが泣いてまうで。

燦太^{さん}にも、長いこと迷惑掛けれへんし。それに

お前かて辛いやろ、マリア。

噴水から溢れ出る水が、どうしても妻の涙のように見えてならなかった。

コンビニエンスストア セブンイレブン

「お疲れ様でしたー」

正午を過ぎた頃になり、エミリはバイトを終えた。他の店員に頭を下げていると、店長に「ちよっと」と呼び止められた。今朝のことかなと思ったら、案の定そうだった。

「今朝は大変だったね。初日早々、あんな目に合ってしまったて」

「いえ、申し訳ありません。私が不甲斐ないばかりに」

ぺこぺこと頭を下げると、店長は笑って「いいよ」と言ってくれた。「あの状況じゃ仕方がないよ。君に至ってはまだ新人なんだから、尚更だし。僕の方こそ、初日からあんな目に合わせてしまつて申し訳ないよ」

「そんな、とんでもない」

エミリは首を横に振るが、店長は陽気な笑顔で「もう過ぎたことだから」と宥めてくれた。初めてのバイト先の店長が明るくて優しい人で、本当に良かったって思う。

「それにしても、凄かったね」

「え？」

「君の弟だよ。銃を向けられても平然としていて、しかも一撃であの大男をノックアウトしてしまうんだからね。大したものだ。まだ中学生なんだろう？」

「あ、はい」

店長が「そうか」と言いながら、何やらポケットから紙切れを二枚出し、そしてエミリの前に差し出してきた。

「あ、あの、これ……」

店長の手にある二枚の紙切れは、ファミリーストランのタダ券だった。

「良かったら、貰ってくれないかな？」

「そ、そんな、悪いです！ 私何もしてないし」

エミリは慌ててタダ券から身を引いたが、店長はなかなか引き下がない。

「大層なものじゃないから受け取ってよ。今朝、君の弟にお礼で渡そうと思ったんだけどね、『いらねえよ、んなもん。貰ったってゴミになるだけだ』って突っ返されちゃってね」

「えっ」

あ、あの子ったら……………。

「すみません」

「いや、そんな謝ること無いよ。ただ、僕には使い道が無いんでね。だからお礼ってことで受け取ってほしいんだ。何なら、君からあの子に渡してくれてもいいし」

エミリは悪いなと思いつつも、「ありがとうございます」とお礼を言っただけで受け取った。ここまで言われたら、突き返すのは返って失礼だ。受け取るしかない。案の定、店長も嬉しそうな笑みを浮かべ

ていた。

店長にぺこりと頭を下げから、エミリはセブンイレブンを後にした。外に出た途端、初冬の風が頬に当たり、思わず身を縮める。街を歩いていると、至る所にクリスマススの飾りやイルミネーションが見受けられる。まだ一か月先なのにも思いながらも、やはり綺麗な飾りには目を奪われ、惹かれる自分がいる。

ふと、体を寄せ合うカップルとすれ違った。二人とも傍から見ても幸せそうで、思わず振り返って目で追ってしまう。

私にもいつか、ああやって体を寄せて暖め合える人と会おう日が来るのかな。

こんな何の取り得も無い自分に、そんな日が来るなんて想像も出来ないけど、それでもやっぱりそんな日を夢見ていたい。ただそれ以上に、心配なことが頭を過ぎった。

『銃を向けられても平然としていて、しかも一撃であの大男をノックアウトしてしまうんだからね。大したものだ。まだ中学生なんだろうっ?』

『「いらねえよ、んなもん。貰ったってゴミになるだけだ」って突っ返されちゃってね』

あの子は強い。身体的にも精神的にも、私なんかよりずっと。

だけど、あの相手突き放すような言動は、どうにかならないかな。もっと素直にならないと、この先一人ぼっちになってしまうんじゃないかって不安になる。

でも、元はと言えば私のせいだ。

あの時、私がもっとしっかりしてれば

「あの、すみません」

不意に後ろから声が掛かり、エミリはハッと我に返った。それから慌てて「はいっ」と返事をしながら振り返った。

顔の線が非常に細く、ブラウンの瞳をしており、肌の色も周りの人より濃い。おそらく日本か中国か、その辺りの観光客だろう。見たところ四十代くらいで、身だしなみがしっかりと整っていて物腰も柔らかい紳士的な人だ。

「グリニッジ・ヴェレッジ行きのバスはこの辺りだと思うのですが、見つからないんです。どこにあるか分かりますか？」

男の話す英語は、生まれながらの滑らかさは無いが非常に聞きやすいものだった。

「えっと、この道を真っ直ぐ行つて、二つ目の交差点を右に曲がるとバス停が見えます。そこがグリニッジ・ヴェレッジ行きです」

エミリは道を指差しながらも、相手に分かりやすいように、いつもよりゆつくりと丁寧に喋った。その心掛けの甲斐があつて、男はすぐに納得した様子で「ああ、なるほど。そっちの方ですか」と言いながら首を縦に振った。

「助かりました。ありがとうございます」

男が帽子を取つて頭を下げたので、エミリもぺこりと頭を下げた。男は最後に穏やかな微笑みを残してから、ちゃんと指し示した方向へと歩いて行つた。

エミリはその背中を見送りながら、弟の姿を思い浮かべていた。

あの子が、あの人くらい紳士的になつてくれたら嬉しいし、安心出来るんだけどなあ。

弟の行く末を案じながら、エミリは憂いの籠つた溜め息を零した。

ライブハウス CANDLE

それから数時間後。日は傾き、ニューヨークの冬空は急速に赤紫か

ら紺色へと変わろうとしていた。街にはいつもの通り光が灯し出すが、この時期はクリスマスのイルミネーションや飾りがあちこちに散らばっており、賑やかな街により鮮やかな彩りを生み出している。ライブハウス『CANDLE』も、すっかりクリスマスの色に染まっていた。入り口には巨大なクリスマスツリーが、店内には小さなクリスマスツリーがそれぞれ飾られ、至る所にイルミネーションが張り巡らせてあり、壁にはリースが掛けられている。店内にいる客の数はさほど多くないがそれなりに賑わっており、店内に流れるBGMがロマンチックな夜の雰囲気醸し出している。そしてこの時期には煌びやかなリスマスの飾りが加わることで、更に店内の賑わいを盛り立てている。人々は店内を流れる華やかな空気に浸り、それぞれの夜を謳歌していた。

ポロン、と鍵盤の音が明瞭に響く。

騒がしかった店内が、その旋律を合図にしんと静まり返る。待つてましたと言わんばかりの勢いで、一斉に奥へと注目した。客達の視線の先には、白い照明に晒された小さなステージがある。ステージにはドラムとベース、ピアノの三つが並んでおり、それぞれの楽器の奏者が既にスタンバイしている。光と無数の視線を浴びる中、ピアノ奏者であるレオンの指が動く。最初は一つ一つの音を噛みしめるように、ゆっくりと鍵盤を鳴らす。美しく、滑らかなピアノの独奏が、先ほどとは一転した静かな店内に響き渡る。

しばらくして、ピタリとピアノの音が止んだ。再び店内に、耳が痛くなるほどの静寂が訪れる。

チツ　チツ　チツ　チツ

ドラムの音を筆頭に、ピアノとベースの音が一斉に響いた。三つの楽器の音が重なり合い、三重奏となって店内を軽やかに踊り出す。静かだった店内が、あつという間に活気に包まれた。

先ほどの賑わいとはまた別種の、演奏と客達と奏者が一つになって店に溶け込んだような、一体感のある空気に満ち溢れていた。

ライブが終わった後、レオンを含む三人の奏者は、店の控え室へと向かった。控え室は賑やかな店内とは打って変わり、驚くほど閑散としている。

三人の内かなりの巨体の持ち主で、黒い肌のビリー・アームストロングがパイプ椅子にドンと腰を落とした。続いて金に近い茶色の長髪で、派手なヘアバンドが特徴的なカラー・パストリアスがパイプ椅子に腰掛け、最後に入ったレオンが扉を閉めてからパイプ椅子に座った。

「とりあえず、今日もお疲れ様ってことで。さっそくお伝えしたいことがあります」

カラーが調子の良い声で話を持ち出すと、レオンが呆れたような声を上げた。

「いつもの寒いギャグなら聞かねーぞ」

「最近、本格的に『寒く（コールド）』なってきたけど、僕の髪の毛は少しも色あせないさ！」

しーん……………。

「……このクソガキが、これ以上言ってみろ。腹に一発入れるぞ」
しばしの沈黙の後、ビリーが頭に血管を浮かべ、物騒な台詞を吐きながらバキボキと指を鳴らす。眼力が人よりある上に筋肉質な体つきをしているからか、全身から凄まじい迫力を放っている。

「ビリーさん怖すぎ！」

「当たり前だ。このくそ寒い時期に寒いギャグを聞かされるこつちの身にもなってみろ」

そしてとどめに、レオンが眉を潜めてばっさりと言い放つ。二人の男に睨まれたカラーはしょんぼりと頂垂れて「二人とも、冷たい」と泣き言を口にしたが、このお喋りな男は「だけど！」とすぐに立ち直って別の話題を出してきた。

「お二人さん、生憎今日は僕の一発芸はここまでっ。これから話すのは、男にとつてはマジでグッドな情報ッス」

「何だと!!」

途端に、二人は一斉に身を乗り出した。もちろん『男にとつて』という部分にである。

「それは気になる。なあレオン」

「ああ。早く教えろ」

最初とはまるきり正反対の反応を示す二人を見て、カラーは声を荒らげて講義の声を上げた。

「二人とも気持ちは分かるけど、あからさまに反応が逆じゃないっすか！」

「やかましい！」

「いいから早く教えろ!!」

二人が同時に叱咤したところで、カラーは不満げに口を窄めた。だがまたしてもすぐに気持ちを切り替え、寒いギャグと罵られたことなど忘れたかのように目を怪しく光らせ出した。

「実はですね、明日から新しいバイトが入るんですよ。そのバイトつてのが結構かわ……」

カラーが言葉を繋げようとしたその時だった。

ガチャッと扉が開く音と共に、一人の女性が控え室に入ってきた。女性の耳に入れる内容ではないと、カラーは口から出そうとした言葉慌てて呑み込んだ。

「やつほー、お疲れ。今日の演奏も良かったよ」

のんびりとした明るい口調で話すその女性は、一つに束ねた黒髪に黒い瞳、一重瞼に健康的な肌色をした在米中国人の女性、ティンヤンファ天焰花だった。

「今日は君たち三人にお知らせしたいことがあります。さ、入って」ヤンファが後ろを向き、開いたままの扉へと声を掛ける。その声を合図に、人影がひよこつとその姿を現した。

「明日から来月末のクリスマスシーズンの間、ここのバイトとして入ってきたジェシカ・フィッツジェラルドだよ。みんな、仲良くしてあげてね」

へえ、結構可愛い子じゃないか。

ヤンファの隣に並んだのは、緩やかなパーマの掛かった茶髪と琥珀色の瞳を持った可愛らしい高校生くらいの少女だった。少々派手な格好だが、それが少女の整った顔を引き立てている。

「明日からここで働かせて頂きます、ジェシカ・フィッツジェラルドです。短い間ですが一生懸命頑張りますので、皆さんよろしくお願いします」

この時のレオンは、数日後に彼女の秘密を知ることになるなんて夢にも思っていなかった。

マンハッタンの街中

バンド仲間と別れて店を出たレオンはグリニッジ・ヴィレッジを更に北上した後、家路に着くべく大通りを一人歩いていた。時計を見

ると、あと十五分ほどで日付が変わる時間だった。

かなり夜が深くなっているが、街は夜の闇を喰らい尽くさんばかりに輝いていた。通りには様々な人種が入り乱れ、あちこちのビルや店が眩しいくらいの光を放っている。それにクリスマス飾りやイルミネーションが加わることで、普段よりも一層華やかさに磨きが掛かっている。こうなると、昼間よりもむしろ夜の方が活気に満ち溢れているくらいだ。

レオンにとっては見慣れた光景で、特に何を思うことも無く淡々と大通りを歩いていた。

だが、今夜はレオンにとって予想外の出来事が起こった。

うわっ！

横の路地から出てきた影が、不意に目の前に飛び込んでくる。それと同時に体に強い衝撃を感じた。危うく倒れそうになったが、踏ん張って何とか持ちこたえた。

だが相手の金髪の女性は衝撃に耐え切れず、思いつきり尻餅を付いてしまったようだ。その拍子に中身を少しぶちまけてしまったらしい。女性の足元にいくつか持ち物が落ちている。

「だ、大丈夫ですか？」

レオンは慌てて落ちた物を一緒に拾い、女性に渡してから手を差し伸べた。何だか、今日は朝っぱらからトラブル続きだな。

金髪の女性が軽く呻き声を上げ、それからバツと顔を上げる。

あ、れ？

「あ、はい」

女性の方も慌てて差し出された手を取って立ち上がった。

「ごめんなさい、ぶつかった上に拾わせてしまって」

女性は頭をぺこぺこと下げて謝るが、レオンの思考は全く別のところ

ろに行っていた。

この人、どこかで見たような……………。

見事な金髪に、薄い灰色の瞳をした女性だ。少し小皺があるものの、元の顔の作りが整っている。若い頃はさぞかし美人だったことだろう。

だがそれを差し置いても、この顔には見覚えがあった。

「いえ、怪我はありませんか？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

それに、声も聞いたことが……………

あ。

「すみません、急いでので失礼しますっ」

女性はまたペコリと頭を下げると、再び慌ただしく走り去っていった。

レオンはしばらくその場に立ち尽くし、後ろ姿が見えなくなるまで女性を目で追った。女性の姿はあつという間に見えなくなり、そこでようやく歩き出す。

深く考え込みながら歩き続ける。あまりにも動きが鈍いので時折人にぶつかって「ばあつとしてんじゃねーよ」と言われるが、今のレオンの脳内はさっきの女性でいっぱいだ。

そして数分後、歩いている内に一つの可能性に辿り着いた。

あの人、まさか……………マリアさん？

レオンは再び足を止め、その場で呆然と立っていた。

何故だろう。こうして立ち止まると、何だかいつも歩く街が異世界のように見えた。

開幕宣言

十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

＜アメリカノ

次は日本編の開幕ですww

開幕宣言

十一月二十五日（金）～十一月二十六日（土）

〈日本／東京

開幕宣言、日本編ですww

**次からいよいよ待降節へ突入します
ミ**

下北沢 某マンション

時は遡り、一日前に戻る。

ピピッ ピピッ ピピッ ピピッ

ひづきさんたらう

氷月燦太郎は手を伸ばし、テーブルの上に置いてある携帯を取ってアラームを止めた。

気だるげに眠たい目を擦り、リビングのソファから体を起こした。次第に意識がはつきりしてくると、燦太郎はふとあることを思いだした。

そういえば、バーシュ預かることになったんやな。

ちようど学校の時間や。起こさんと。

物音一つしないし、おそろくまだ眠っているのだろう。燦太郎はふうと息を付いてソファから腰を上げた。木村バージニア・モーニングが眠る部屋の前まで移動する。本来は燦太郎の部屋なのだが、寝室は一部屋だけなのでバージニアに好きなように使わせ、今はリビングのソファをベッドの代わりにしている。

「バーシュ」

ノックをしながら呼び掛けてみたが返事が無い。もう一度ノックしてみる。

「バーシュ、朝やで」

やはり返事が無い。あかん、こりゃあ確実に寝てるわ。

「入るで」

こうなったら、直接体を揺すってやる他無い。寝ていると分かっているが、燦太郎は一応声を掛けてから扉を開き、中に入った。

ぬいぐるみに囲まれながらスヤスヤと眠るバージニア。やはりいつも通り白クマのぬいぐるみを抱いている。ぬいぐるみは彼女の母がプレゼントしたもので、しかも全てお手製だ。だが今抱いている白

クマは唯一、燦太郎が昔手作りしたものである。やはり店で売っているものよりはみつともないし、彼女の母が作ったぬいぐるみの方が断然上出来だ。

それでもバージニアが寝る時に胸に抱くのは、必ずへんてこな白クマだ。燦太郎としては嬉しいことこの上無い。

「バーシュ、バーシュ」

細い肩を揺すったところで、バージニアの重たそうな目蓋が開き、緑色を覗かせた。「ううん」と声を漏らしながら起き上がり、腕を伸ばして大きく背伸びをする。

「おはよう」

ほくそ笑みながら話しかけると、バージニアは顔を上げて腕を下ろした。虚ろな瞳でばおつと燦太郎を見つめ、ニコツと笑窪えくぼを浮かべる。

「おはよおママ」

「誰がママや、誰が」

首を傾げるバージニア。燦太郎は呆れつつ苦笑した。相変わらず凄まじい寝惚けぶりやな。

「……燦ちゃん？ 何でここに？」

「何でも何も、ここは俺の部屋やで」

バージニアは「んー」と惚けた声を漏らしながら、ふあと欠伸をした。緑の瞳が涙で滲む。

「……………あ、そうだった」

ようやくここに来た経緯を思い出したようだ。バージニアは寝ぼけた顔に笑みを浮かべた。

「おはよう燦ちゃん」

「おはよう。そろそろ学校行く時間やで」

「んう、めんどい」

バージニアが面倒くさそうに毛布を捲ったところで、朝食の準備をするかと部屋を出てキッチンに向かった。目玉焼きを作ってソーセージを大量に焼き、トーストにマーガリンをたっぷり塗る。朝食が

出来上がって「バーシュ」と呼ぶと、バージニアは「はい」と大変元気のよろしい声で返事をした。お泊り気分で興奮し、すっかり眠気は吹っ飛んだらしい。

「わぁ！ソーセージ！」

焼きソーセージはバージニアの大好物だ。その愛着は、ソーセージの大食いなら優勝出来るかもと言いのけるほどだ。俺やったら、朝からこんなこてこてしたもん出されたくないけどな。

「今日はお泊り祝いつてことで特別や。俺はいらんで、全部食べてええよ」

「やったあ！」

バージニアは椅子に座って「いただきます」と言うなり、飢えた捨て犬のようにがつつき始めた。ソーセージを頼張る姿が何だかハムスターみたいで、思わずプツと笑ってしまった。

「どうかしたの？」

「いや、何でもない」

バージニアは不思議そうに首を傾げたが、今は食べることの方が重要みたいで、「そう」とだけ言って追求しなかった。バージニアの咀嚼音とフォークの音が、何でもか心地よく聞こえる。

余程嬉しいのか、しばらくすると鼻歌を歌いながら食べ出した。それはさすがに行儀が悪いので「ご飯中に歌わない」と注意する。「はい」と不満そうな声が上げつつも、すぐに怒ることも忘れてまた好物のソーセージにかぶりつく。

その動作の一つ一つが愛くるしくて、燦太郎はとうとう破顔した。

バージニアが部屋に来たのは、昨日の夕方だった。

まだ仕事の最中だったので、バージニアのことを知ったのは叔父からのメールを見てからだ。美容部員の仕事は目が回るほど忙しいと知っているの、そこを配慮して母や叔父が日中にメールや電話を寄こすことは滅多に無い。

きつと何かあつたのだろう。燦太郎は休憩の間に、直接叔父に電話を掛けることにした。

「もしもし叔父さん。久しぶり」

『燦太か。悪いな、仕事中やのに』

「ええつて。余程のことがあつたんやろ？ どないしたん？」

『あのな、忙しいところに悪いんやけど、お前に頼みたいことがあるんや』

「気せんでええよ。毎日忙しいんやで、それ言い出したらキリないし。で、頼みつて？」

『実はな、明日からアメリカに出張でしばらく帰れへんのや。そんな、急なんやけど……』

数秒ほど間が空いた後、電話口から聞こえたのは驚きの一言だった。

『今日からジニーを、しばらく預かつてほしいんや』

予想外の一言に、燦太郎は目を丸めた。

「預かるつて、叔母さんがいるんやろ？」

『それが……マリアは急用が出来て、一か月ほど家空けることになったんや』

「叔母さんが？」

あの真面目で娘思いの叔母さんが、誰もいない家に娘を一人で置いていくなんて。

それに、一か月も家を空ける急用つて一体……。

「一か月つて……それほんまなん？」

『ああ。せやから明日から家に誰もおらへんのや。いくらもう十歳やからつて、さすがに一か月間ずっと一人にしとくのは不安やし、精神面でもよろしゅうないし』

いつもは楽観的な叔父さんだが、その時ばかりはかなり切羽詰った様子だった。当然だ。愛娘を家に一人で置いておくのが心配で仕方ないのだろう。

それに俺も心配や。寂しがり屋で甘えん坊なバーシュを、一か月も

一人きりにするなんて。

燦太郎はふうと息を付き、深く悩むことなく同意した。

「分かった。しばらくは俺が預かる。とりあえず、帰るの遅なり^{おそ}そうやで、勝手に部屋に入って置いてってくれればええわ。合鍵、あるよな？」

『ああ。ごめんな、ほんまに』

「ええって。ちゃんと面倒見るで安心しいや」

燦太郎は母子家庭の一人っ子で、その上母親が仕事で忙しくてあまり一緒にいられなかったこともあり、小さい頃から叔父の家にしょっちゅう遊びに行っていた。

そのため、バージニアが赤ん坊の頃から妹のように可愛がっていたのだ。今やバージニアの世話はその十八番である。

『おおきに。助かるわ』

電話越しでも、叔父のホツと胸を撫で下ろす姿が容易に想像出来た。

そして今、バージニアが目の前でソーセージを頬張っているわけだ。この子にとって、母親と長い間離れるなんて初めての経験や。

さぞかし寂しいやろうに、そんな嬉しそうに笑って。

こりゃあ、しっかり面倒見てやらんとな。

健気に笑う姿を前に、男であるにも関わらず母性本能をくすぐられる燦太郎だった。

朝食を済ませた後、支度を終えて1LDKの部屋を二人一緒に出た。バージニアはこの辺りの道にまだ慣れていないので、今朝はバス停まで同行して道案内することになった。

「ねえ燦ちゃん」

「ん？」

「久しぶりだね、こうやって二人で一緒に歩くって」

「ああ。ここ数年は忙して、年末年始とお盆くらいしか会えへんか

「つたし」

「そうだよ、燦ちゃん全然来てくれないんだもん」

ぷくつと頬を膨らますバージニア。初冬の寒さで顔の筋肉がガチガチに固まっても可笑しくないこの時期に、表情豊かなのも相変わらずで。

「ごめんな。寂しかったん？」

「うん。でも今は全然寂しくないよ。これからはしばらく一緒だもん」

「せやな」

ジャケットをまとい、ランドセルを揺らしながらはしゃぐバージニアの後ろ姿を、燦太郎は顔を綻ばせながら見ていた。

井の頭線の車内

『下北沢ー、下北沢ー』

車内に停車を知らせるアナウンスが流れる。

ipodで音楽を聴いていた金亮（こがねやう）は、このアナウンスでバツと顔を上げた。

電車が停車し、人の群れが車内に流れ込んでくる。井の頭線の朝のラッシュは夕方ほど混み合ってなく、下北沢駅まではかなりのスペースを取れる。大体この駅を境に、だんだんと定員が増えて面積が狭くなっていくのだ。今の時点ではまだ余裕だ。それ故に、乗ってくる人々の顔をじっくりと窺うことが出来る。

とはいえ、亮の場合は生来の目付きであまりじろじろと見ているとどうしてもガン付けていると勘違いされて怖がられるのでチラチラと視線を配ることしか出来ないのだが。

ガンを付けてしまわないよう気を付けながら見つめること数十秒、探していた顔を発見出来た。小さく高鳴っていた胸がドキンと弾む。

来た。

亮はその女の子を見失わないように、だけど間違つてガン飛ばさないように見つめ始めた。イヤホンは付けっ放しだが、今はi podから流れる音楽も耳から耳へとすり抜けていく。

女の子は空いていた亮の向かい側に立ち位置を定めた。胸の鼓動が更に高まる。

別に美人なわけでもスタイルが抜群なわけでもない。どこにでもいる平凡な女の子だ。セミロングの黒髪に地味な色合いの服装で、むしろあまり目立たないタイプだ。しかも身長もかなり低く、つり革にも手が届かないほどである。

彼女のことは半年前から知っているけど、未だに声を掛けるところか目すら合わせられない状態だ。怖がられるんじゃないかという不安と、好きな子を前にした気恥ずかしさで、どうしても塞ぎ込んでしまう。不幸なことに、亮はその軽そうな外見とは裏腹に、女の子にナンパをする柔軟さなど持ち合わせていなかった。

亮は女の子から視線を外し、チラリと視線を横にずらした。

隣にいる乗客は180センチ以上ありそうな長身で、少し癖のある髪を肩の近くまで伸ばした青年だった。顔立ちが整っていて、左の口元にある黒子がよく似合う。目元だってスツと引き締まっているのにどこか優しげで、相手を無意識に怖がらせてしまう亮とは大違いだ。

あの子も、こういう人に見つめられるんだったら大歓迎なんだろうなあ。

自分に声を掛ける度胸が無いことは分かっている。

だけど、身長に恵まれていない上に見つめるだけでガンを飛ばしてしまう亮としては、隣の顔も身長も恵まれている青年が羨ましくて仕方が無かった。

視線に気付いたのか、隣の青年が亮をチラリと見た。視線が合つて、亮は慌てて顔を背ける。

何となく忍びない気持ちになり、再び向かい側の女の子を眺め始めた。身長が足りなくてつり革に掴まれないからだろう。振動で揺れる中、体を支えようと必死に踏ん張っている。

どこかに掴まることが出来れば、楽になるだろうなあ。

亮は支えてあげたい衝動に駆られ、ドキドキと心臓を弾ませた。だがどうしても声を掛けられず、そんな自分が情けなくてもどかしかった。

胸の鼓動がますます高まっていく男を余所に、電車は相変わらず淡々と揺れていた。

渋谷 西武百貨店A館 一階化粧品フロア

十一月下旬から十二月上旬は、街中のデパートでクリスマスセールが開催され、激しい競争が繰り広げられる時期だ。

西武百貨店では毎年、十二月上旬にクリスマスセールが始まる。クリスマスセール期間中は客足が倍増するので、売り上げを大幅に伸ばす絶好の機会でもある。当然、新商品やクリスマス限定品などが加わって、いつもの倍以上の品を仕入れることになる。

在庫の整理は毎日の仕事だが、十一月下旬は試供品を大量に導入し、セールに引き出す品を検討する時期なので、いつもより頻繁に整理をしなければ在庫がたちまちいっぱいになり、おしくらまんじゅう状態と化してしまう。

こうなると当然、戦力になるのは男だ。

「パシリだ」

同僚の眼鏡、ひろせつや広瀬遼一が台車に段ボールを置いたところで溜め息混

じりに呟いた。

「在庫が爆発寸前なのは分かってる。でも、だからって何で今なんだ！　っしやあ昼飯だつてまさにその瞬間に『悪いけど、食べる前に在庫整理してきて』って！　労働基準法違反だ！」

涙ながらの演説に、燦太郎も思わず作業の手を止めてしまった。はあと溜め息を吐く。

「それを言うなや。余計腹が減る」

「ああ、女ってどうしてこう人使いが荒いんだ？　なあ！」

「しゃあないやろ。新人だけじゃ手え回らんのや。今年入ってきた子、全員女の子やしな。そんで男は俺とお前だけやし」

これ以上文句を言っても虚しくなるだけなので、再び作業に入ることにした。

「お前は良いよ。化粧品が隙間なくぎっしり詰まった段ボールを一度に八つも、それも涼しい顔で持てる化物だからな！　どうなつてんだよお前の筋肉は！　鉄腕アトムか？」

現実味の無いことを恨めしげに叫ぶ親友。だが、遼一の言っていることは事実だ。

隣で作業に入り出した燦太郎は、現に片手に段ボール箱を四つずつ掲げ、一度に計八つの段ボール箱を軽々と台車に乗せているのだ。

「それロボットやし。俺は歴とした人間やから」

燦太郎はその細身の体に似合わず、並外れた怪力を持つている。もちろん、ロボットなどではない。現代の日本を生きるただの人間だ。

この怪力だつて、あの日を境にいつの間にか得たものなのだから。

「歴とした人間は一度に八つも段ボール持てねーよ！　仮面ライダーでもねー限りな！」

「鉄腕アトムの次は改造人間かい。ええ加減、機械から離れろや。てゆーか、そんな力の限り叫んでると、昼飯にあり付く前にくたばってまうで？」

「うう、それは困る」

昼飯を話題に引つ張ることで、喋りつ放しだった遼一は泣く泣く作業を開始した。

そうして倉庫の段ボール箱を控え室に運ぶ作業を繰り返し、十分後には全て運び終えた。

そして控え室の棚に段ボール箱を仕舞う作業に入り、圧倒的力の差によって一・二段目には遼一が、三・四段目には燦太郎が梯子を使って詰めることで分担した。その後だった。

ピロロン、ピロロンと携帯の受信音が控え室で響いた。

「おい氷月、携帯鳴ってんぞ」

段ボールを一足先に仕舞い終えた遼一が声を掛けてきた。

こっちは梯子に足を掛けながら片手に二つの段ボール箱を持ち、もう一方の手でそこから一箱ずつ取って仕舞っているところだ。いくら怪力でも気を抜いたら落としかねない。

「悪い。今手え離せへんのや。そのバッグん中に入ってるで出しといて。それメールやで」

「分かった。つか離れたらマジで人間じゃねーもんな」

遼一は小棚の上に置いてある燦太郎のショルダーバッグを手に取り、チャックを開いた。

その瞬間、遼一が絶句した。バッグへ伸ばしていた手が、ピタリと止まる。段ボール箱を詰めている燦太郎はそれに気付かない。

「遼一、どないしたん？ 目え付きやすいところに入ってるはずやけど」

だが受信音がいつまでも鳴り止まないことには、さすがに違和感を覚えたのだろう。燦太郎は最後の一個を棚に詰めながら尋ねた。

まだ返事が無い。とうとう受信音も鳴り止んだ。

「何やねん、いきなり黙りこくって」

燦太郎は最後の一個を詰め終えたところで、梯子から下りて遼一の所へ歩み寄った。燦太郎の気配に気づいた遼一は、何故か恐る恐るといったように振り返り、顔を青ざめていた。

「なあ……まさかお前、小学生の女の子を誘拐したのか？」
「はあ？」

意味不明な発言に、燦太郎は思わず声を荒げた。

「悪いことは言わない。すぐに帰してやれ。ニュースで報道されてからじゃ遅いんだ。な？」

終いには両肩を掴まれ、言い聞かせるような強い口調で犯罪者扱いされた。

「アホか。何で俺が小学生を誘拐せなあかんねん」

「じゃあ、これは何だ？」

遼一が神妙な顔付きで燦太郎のバッグに手をつ込み、ある物を目の前に突き出した。

携帯ではない。だがそれを見た瞬間、燦太郎も絶句した。

遼一が目の前に出してきたのは、どこからどう見てもリコーダーだった。

何でこんな物が、と首を傾げたが、すぐに原因は分かった。

リコーダーには、『四年二組 木村バー吉ニア・モーニング』と油性マジックで書かれたシールが貼られている。

「……それ、従妹いとこのや」

「え？ 従妹？」

「……渡すの、忘れてしもうた」

燦太郎はその場で脱力し、右手で頭を抱え込んだ。

某小学校付近の住宅街

それから数時間後の夕方。バー吉ニアは唇を尖らしながらとぼとぼと歩いていた。

「燦ちゃんのバカ……」

カアカア、とカラスの鳴き声が耳に入る。余計虚しくなってきた、はあと溜め息を付いた。

今日の昼、六限目の休み時間にロッカーからランドセルを出して開いた時だった。

「…………あれ？」

思わずそう声を漏らした。今朝入れたはずのリコーダーが入っていなかったのだ。

「あれ、あれ…………」

ランドセルの中はもちろん、ロッカーも手当たり次第探した。ただと見つからない。

慌てふためきながら探していると、親友の白館灯里しらだてあかりが声を掛けてきた。

「木村、どうしたの？」

「リコーダーが無いの。今朝ちゃんと入れたはず……………あ」
喋っている途中で、バー吉ニアの記憶回路が繋がった。

「入らへんのか？」

「うーん、入るのは入るんだけど、そうすると今度はフタ閉まんないの。何か他にカバン持ってた方がいいかな。丁度良いの無いか探してくる」

そう言つて立ち上がった矢先、燦太郎の「ちょい待ち」の一声が上がつて立ち止まった。

「リコーダー一本くらいでカバン探すのもアホらしいやろ。俺が持つてる」

「え、いいよそんなの。どうせバス停まで行ったら、あたしが持つてなきゃいけないだし」

「せやけど、そろそろ出んとバス間に合わんで。とりあえず、な？」
「うーん……………」

確かにバスに乗り遅れるのは困る。バー吉ニアは素直に好意に甘え

ることにした。

『分かった。はい』

リコーダーを受け取ると、燦太郎はそれをショルダーバッグに仕舞い込んだ。

『バス亭に着いたら、ちゃんと渡したるでな』

ただど渡されなかった。あのリコーダーはまだ燦太郎のバッグに入ったままなのだ。

「忘れた？」

「……うん。どうしよう、灯里ちゃん。リコーダーだから人から借りれないし」

六限目は音楽。ここ最近は発表会に向けた曲をリコーダーで練習する授業が続いている。

「諦めな」

灯里から返ってきたのは、清々しいほどに割り切った答えだった。

「そんなあ、リコーダーの授業なのにリコーダー無いなんて恥ずかしいよあ」

「だってどうしようもないじゃん。ま、適当に頑張んなよ」

バージニアは、あっさりと言い放つ親友を恨めげに見つめた。

「ほら行こう。忘れ物した上に遅れちゃまずいでしょ」

バージニアは泣く泣く教科書と楽譜だけを手にして教室を出た。

その日は運悪く、リコーダーを忘れたのはバージニアただ一人だった。音楽の先生は優しいし、忘れ物の常連ではないので叱られることは無かった。それに音楽室に置いてある予備用のリコーダーを貸してくれたので、一応授業に参加することは出来た。

だけどホッと安心したのも束の間。一人だけリコーダーの色が違々と、自然と視線を集めてしまうのだ。もちろん視線を向けてきたクラスメイト達に悪気は無かっただろうが、バージニア自身は恥ずかしくて集中出来なかった。

何より、いつものリコーダーじゃなかったから使い勝手が悪く、特に高い音が満足に出せなかった。

リコーダーの授業は好きなのに、この時は早く終わってほしいと願ってばかりいた。

「バカ、バカ、バカ……」

もちろん、燦太郎が悪いわけじゃない。あの時の判断は適切だったと思う。悪いのは、前の日の夜にリコーダーを入れておかなかった自分だ。

「燦ちゃんのバカ、おせっかい」

でもあたし、どうせ後で持たなきゃいけないんだからいいって言ったのに。

『バス停に着いたら、ちゃんと渡したるでな』

「嘘つき」

違う、嘘なんか付いてない。

本当に渡すつもりだったんだ。ただ忘れちゃっただけで。

第一、あたしだって忘れてたじゃない。いくら燦ちゃんと並んで歩くのが久々で嬉しかったからって、リコーダーを預けてること忘れちゃいけなかったのに。

自業自得だって分かっているのに、どうしても燦太郎を責めてしまいう自分がある。今目の前に燦太郎が現れたら、謝られても怒りに任せて八つ当たりしてしまうだろう。

それがまた更に、落ち込むバージニアを苛つかせた。

「もうっ！」

苛立ちが頂点に達し、たまたま足元に当たった石を蹴り上げた。同時に、横の曲がり角から人影が出てきた。

「イデッ！」

その呻き声とガシャンと何かが落ちる音で、バージニアは苛立ちも忘れてバツと立ち止まった。そして目の前の人物を見て愕然とした。

「……………っ……………て」

バージニアの前で頭を押さえているのは、逆立った金髪をした小柄な男だった。パンク風の軽いファッションをしていて、いかにもコンビニの前でたむろっついそうな感じである。男の足元にはたった今バージニアが蹴った石が転がっている。石を改めて見ると、ピンポン玉ほどの大きさはある。当たったらかなり痛いだろう。

数十秒後、痛みが治まってきたのだろう。男は頭を押さえながら石が飛んできた方へ顔を向けた。物凄い目力を持つ鋭い瞳が、バージニアの姿を捉える。男の目付きがあまりにも鋭く、バージニアは思わずビクツと肩を震わせた。

「ご、ごめんなさい！ あ、その……………」

どうしよう。この人、凄く怖そう。

今やバージニアは泣きたい気分だった。実際、涙目になっている。ついに男が頭から手を離し、体を完全にこっちに向けた。恐怖のあまり、体が動かない。謝ろうにも顔を直視出来ないし、口をパクパクと動かすのがやっとの状態だ。

助けて、燦ちゃん、パパ……………ママあ。

「あの、そんな怖がらなくていいよ。俺、大丈夫だから」

……………え？

自分の耳を疑い、恐る恐る顔を上げる。

パンク風の格好をした鋭い目付きの男は、困ったような笑みを浮かべていた。そして少し屈み込んで、バージニアの高さに合わせた。

「この辺って人通り少ないけど、今の俺みたいになにに誰か通る時あるから、気を付けた方がいいよ。その人が怪我でもしたら大変だしね」

話し方も極力丁寧で、涙目になっている自分を氣遣っているのは明らかだった。見かけは怖いのに、表情と声が凄く優しい。

「あの、頭……」

「あ、これくらいなら大したこと無いよ」

確かに血は出ていないけど、全くの無傷ではない。こめかみの所に痣が出来ている。

「ごめんなさい」

ようやく心から謝罪の言葉が出た。さっきの身の危険を感じて咄嗟に出た言葉とは違う、ちゃんと気持ちの籠ったものだっただ。

「もう大丈夫だから、気にしないでいいよ。それじゃあ」

男は優しい笑みでバージニアに手を振りながら、その場を去っていた。

バージニアはしばらくその場に立ち尽くした。今度は恐怖ではなく、安堵感と温かい気持ちでバージニアの体を満たしていた。

あの人、あんな鋭い目付きをしているのに、凄く穏やかで優しくかった。

人は見かけに寄らないって、本当なんだ。

でも、あそこまで外見と中身が極端な人って、そうはいないだろうなあ。

もう、会えないのかなあ。

途端に、あの男の人とこのまま別れるのが嫌になった。別に深く関わりたいうってわけじゃないけど、それでも二度と会えないというのは、何だか寂しい。

バージニアはふと湧き上がってきた好奇心に背中を押されるように、男が歩いて行った道へと曲がった。細い一本道を真っ直ぐ突き進むと、住宅街を抜けて広い通りに出た。辺りをキョロキョロと見回しながら通りを行ったり来たりするが、あの金髪の男はどこにもいない。

やっぱり、そう簡単に会えるわけないか。

さすがに諦めて、戻ろうと歩いた道を逆に辿り始めた。その途中だった。

通りかかった老舗の窓の向こうに、あの金髪の男の姿があった。

あ、いた！

バツと足を止め、その老舗の前で立ち止まった。もう一度じっくりと窓の向こうを見て確認したところ、見間違いじゃなかった。ちゃんとあの男の人がいる。

店内ではざわざわと終わらない雑談が繰り広げられていた。中には金髪の男の他に、白髪混じりのおじいさんと数人の若物がいる。おじいさん以外は、金髪の男とよく似た年代だろう。

わあ。壁にギターがいっぱい。楽器屋さんかな。

店内の壁には、たくさんのギターが飾られている。クラシックギターやアコースティックギター、エレクトリックギターなど、種類がいっぱいあって数えきれない。それにギターだけでなく、ピアノやベース、ドラムなどいろいろな楽器が豊富にある。

あの人、音楽やってるんだ。

バージニアの心は歓喜と好奇心で踊っていた。

だけど、さすがにずっと覗いていては怪しまれる。バージニアは窓から頭を引っ込め、引き続き店の前に居座り、若者達の雑談に耳を傾けた。

声は聞こえるけど、窓ガラス越しなので話している内容までは分からない。けどみんな親しげに話をしていて、和気あいあいとしている。内容が分からなくても、聞いていてとても楽しかった。

しばらくすると、店内から雑談の気配が消えた。何だろうと思わずまた窓から覗き見る。

店内の人達は、それぞれ楽器の前に立ってスタンバイしていた。金髪の男の人は、ギターかベースを掲げている。よく見えないから、どっちか分からない。

それにしても、みんな格好いいなあ。

スタンバイしてるだけでこんなに格好良いのに、演奏始めたらどうなるんだろう。

どうしても気になり、再び窓を覗いた。胸の中は期待でいっぱいだ。店内で、「スリー、ツー、ワン、はい」と掛け声が上がった。

まずドラムが入った。タタタンとノリの良いリズム感に、こっちの胸も騒ぎ出す。

次に、ピアノとベース、エレクトリックピアノが順番に入ってくる。ベース特有の低音、よく響くピアノの激しい旋律、エレピの程好い電子音が混ざり合い、一つの音になる。ボロン、

ピロン、ピロロボンッ

そしてギターが入り、弾みと迫力のある音で曲を高めへと引き上げていく。

ギユンッ ギユウーンッ

ここでギターを鳴らしているのが金髪の男だと分かり、ますます心を弾ませた。

次第にピアノを中心にそれらの音が重なり合い、タンタンタンッと一斉に弾んだところで演奏が止んだ。二・三秒ほど間を置いてピアノの独奏が始まった。

ボロン

今までの激しいリズムとは打って変わり、小川のせせらぎのような音が響き出す。

うわあ。

バージニアはすっかり、窓の向こうの演奏会に釘付けになっていた。すごい。こんな小さくてボロボロな店なのに、あの人達が楽器を鳴らすと、たちまち大きなライブステージに早変わりしちゃった。

小さな老舗の中での演奏会は、幼いバージニアの目にはとてつもなく新鮮で輝いて見えた。

すごい、本当にすごいよ。みんなかつこよくて、輝いていて、息がぴったりで、すごく楽しそう。

あの輪の中に混ざれたら、どんなに楽しいだろう。いいなあ。

もはやリコーダーの件で苛立っていたことなど、この時にはすっかり頭から消え去っていた。

「あ」

ピアノのソロが続く間、亮の間の抜けた声が上がった。

「どしたの？」

長い髪に緩いパーマを掛けた垂れ目の女、吉田^{よしだ}みのりが尋ねてきた。

「あの子……………」

「何？ あの窓から覗いてる外人の女の子、知り合い？」

「いや、さっきちょっとぶつかって」

「怖がられただろ？」

からかうような口調で口を挟んできたのは、能面顔のニット帽男、
藤崎^{ふじさき}草平^{そうへい}だった。

「まあ……………うん」

こっちは極力優しく接したつもりだが、それでもかなり体が強ばった様子だった。何だか可哀想なことをしたな。

「そりゃ怖いよなあ。『どこ見てんだコラァ!』って怒鳴られると思うと」

「俺は怒鳴らないよ。あれ以上怖がらせるの、かわいそうだし」

演奏中にこうして普通に喋っていられるのは、ジャムセッションだからだ。楽譜無しでその場で自由に演奏して合わせるセッションだからこそ、演奏の合間にこうやって会話をすることが出来る。

「それにしても、あの子何で中入ってこないのかな？ やっぱ金の顔が怖いから？」

「だろうぜ。さっきは人目に付く可能性があったから我慢してただけで、ここに入った瞬間、人が変わったかのように『てめえ、さっきはよくも俺様にぶつかってくれたなあ! 俺様のオニユ一の服が汚れちまつたじゃねーか。どうしてくれんだよ、ああ?』って言われたらどうしよう。ふえーん、って感じ」

「最後の『ふえーん』って、アンタが言うためちやキモいんですけどお」

「うわっ、今の台詞すっげー傷ついた!」

「……単に珍しがってるだけだと思うよ」

勝手に妙な図を想像して興奮している二人に対し、侮辱されている当の本人である亮は怒りもせず、平常通りの態度であっさりと突っ込みを入れた。

「でも、さっきからずっと覗いてるじゃん。やっぱ入りたいんだよ。楽器が好きで、欲しいのがあるんだけどお金持っていないしーって感じ?」

「楽器とかじゃなくて、俺らのライブに興味持ってる可能性もあるぜ。亮、お前どう思う?」

「うーん、多分そのどっちかだと思うけど、もしかしたら両方かもしれない」

「なるほど」

「ねえ、試しに中に入れない？　どっちにしろ、興味津々なのは変わらないんだし」

三人で盛り上がっているところに、みのりとは対照的なツリ目をしたショートヘアの女、増永ますなが絵梨えりが加わり、得意そうに一つの提案を示した。

「いいねそれ！」

みのりが身を乗り出す。その際に弦に指が触れてボロンと音が鳴った。

「あ、音鳴っちゃった。このままベース入りまーす」

勢いに乗ってみのがベースを鳴らし出す。

「お、何か盛り上がってきたねー。よし、ドラムも入ってー」

絵梨が指示すると、草平もドラムを叩き出した。

「さてと、このままテンション上げて私も入るとしますか」

リーダーシップを発揮していた絵梨も続いてエレピを弾き始めた。

「というわけで金、こがね呼んできて」

「え、俺が？」

「何よ、嫌なの？　今演奏してないのアンタだけでしょ？」

絵梨が眉を顰めると、亮は困ったように口籠った。

「嫌ってわけじゃないけど、俺に声掛けられるのは怖いんじゃないかなあって」

「そんな弱気だから未だに彼女出来ねーんだよ、お前は。というわけで俺が……」

「アンタは駄目！　鼻の下伸ばして、可愛い子に声掛けたいって下心丸出しなんだよ！」

「ええー」

「ったく、一人は見かけ倒しでもう一人はロリコンかよ。使えねー野郎共だなおい！」

「俺はロリコンじゃねえー！」

叫んだ勢いでドラムの勢いが強くなり過ぎた草平を、絵梨とみのりが揃って「ドラムうるさい！」と叱咤する。その後は無視して女子

二人で話を進めた。無視されて落ち込む草平を、亮が歩み寄って背中をぽんと叩いて憐れむ。

「役立たずの野郎共よりも、やっぱここは同性のウチらが行った方が良いか」

「じゃあ私いこっか？」

「そうだね。みのりは和み系だし、声掛けても怖がることないっしょ。よし、行つといで！」

「オッケー。それじゃあ行つてきま」

「まだ止めとけ」

みのりの言葉を遮ったのは、ピアノ担当の白髪混じりのオーナー、ますながえいさく増永栄作だった。

「何でよお父さん。良いじゃない見物くらい」

娘の絵梨がエレピを弾く手を止め、非難の声を上げる。だが栄作は動じることなく、淡々とピアノを弾き続けながら言葉を続けた。

「駄目とは言わんが、もう少し様子を見た方が良い。子供つてのは好奇心が強いが、同時に飽きるのも早く、またすぐ別のところに興味が行ってしまうもんだ」

「そりゃそうだけど……」

「例えば、興味を持った部活があつたとする。先輩や友達に誘われて何となく入部してみたけど、思っていたのと違って続かなかつた。これと同じようなパターンになることが多い」

「ああ、なるほど」

絵梨だけでなく、この場にいる全員がそれぞれ納得したようにコクコクと頷いた。

「そこで、これから一週間、さり気なく様子を見るんだ。もしほぼ毎日のように来たら、それは余程関心を持っているということだ。中に入れて間近で聴かせてやると良い。小学生なら、居残りでもない限り下校する時間が大幅に遅れることも無いだろうしな。どうだ？」

「……………分かった」

絵梨が口を尖らせながらも再び演奏を始めたところで、栄作は「おい」と亮に声を掛けた。

「大丈夫だとは思うが、念のために言っておく。この一週間、まかり間違つてガンを飛ばさんように気を付けろよ。折角興味を持つても、怖がつて逃げ出してしまつからな」

やるつもりもないことを忠告されて少し泣きたい気分になったが、亮は「はい」と素直に頷いた。

「よし。それじゃあ、そろそろサビに入ろうか。亮、べそ掻いてないでギター！」

栄作の掛け声と共に、亮は愛用のギターをかき鳴らした。

下北沢 某マンション付近

マンションの前に辿り着いた燦太郎は、はあと深い溜め息を吐いた。もう何度目だろうか。昼にリコーダーの失態を知ってから、一人になると絶えず溜め息を漏らす始末だ。

バーシュ、怒つてるやろなあ。

あの子が一度機嫌を損ねると、立ち直るまでに時間が掛かることは今までの経験でよく知っている。今回は好きな音楽の授業に差し支えたのだ。さぞかし怒っているに違いない。

そう思つて左手にはケンタッキーの袋を、右手にはおやつ用のソーセージの詰め合わせが入ったコンビニの袋を下げている。これであつさり機嫌を直してくれるとは思えないが、燦太郎としては何か詫びをしてやらないと気が済まなかった。

言い訳無しでひたすら謝つて詫びをすること。今の自分に出来ることはこれしか無い。

燦太郎は意を決し、勢い良くマンションへと入っていった。そのま

まエレベーターで四階まで上がり、自分の部屋の前で再び立ち止まった。

今までの経験で、こういう時には扉を開けた瞬間に物が飛んでくることも目に見えている。大抵はぬいぐるみといった柔らかいものだけど、あんまり機嫌が悪いとノートや教科書、酷いと筆箱やランドセルなどが飛んでくることもある。

今日は何が飛んでくるんやろなあ。

燦太郎は慣れきっていることもあって、あっさりと腹をくくって扉を開けた。

「ただいまー」

瞬間、胸に何かが飛び込んできた。

だが、ぬいぐるみでも教科書でもノートでも文房具でもなく、バージニア本人だった。その振動で少しふら付いたが、「っと」と踏ん張って体を持ち直した。

「お帰り！」

バツと上げた顔には怒りなど欠片も無く、満面の笑みが広がっている。

予想外の展開に一瞬たじろいだ、こういう経験が全く無いわけではなかった。

こうやって抱き付いてくるのは、余程良いことがあってそれを報告したくて仕方ない時だ。

「あのねあのね！ 今日帰りに石蹴ったら、怖そうなお兄さんに石ぶつかっちゃって、怒鳴られるかなって思ったんだけど、その人見かけと違って凄く優しくてね、また会えないかなってついていたらめちゃくちゃ格好良いの見つけたんだよ！」

余程嬉しいことなんだろう。早口過ぎてあまり内容を呑み込めない。「おいおい、落ち着きや。とりあえず中入らせて。それからゆっくり聞かせて。な？」

「はい！ あつ、ねえそれ何？」

離れたところで、両手の袋の存在に気が付いたのだろう。目を輝かせて尋ねてきた。

「ケンタッキーのチキンとフライドポテト、それでコンビニのソーセージ」

袋を見せると、バージニアは「わあ！」と歓喜の声を上げた。

「こんなにいっぱい、どうしたの？ これもお泊り記念？」

「いや、これは今日の詫びや。リコーダー、渡すの忘れてしもうたやろ？」

バージニアが「あつ」と素っ頓狂な声を上げた。どうやら、今の今まで忘れていたようだ。

「ごめんな、大変やったやろ？」

「ううん、もう良いの。今日の帰りに良いことあったの、ある意味それのおかげだから」

よく分からないけど、あんまり嬉しそうに話すものだから燦太郎も嬉しくなった。

「そうか。でも、これからは氣い付けるでな」

「うん！ ほら、もういいから早く入って」

もはやリコーダーのことなどどうでもいいのだろつ。まだ靴も脱いでいない燦太郎の腕をぐいぐいと引っ張る。いくら嬉しくても、さすがに土足で入るわけにはいかない。

「ちよお待つて。まだ脱いでへんのやつて」

言いながら靴をサッサと脱ぐ。足を踏み入れた途端にバージニアに腕を引っ張られてリビングへと連れていかれた。その時だった。

平和なムードをぶち壊すように、携帯の着信音が鳴り響いた。叔父からの着信だった。

「悪い、電話や。ちよお待つてな」

「ええー」

不満げな声を上げるバージニアに「ごめんな」と宥めながら笑いかけ、小さな頭を撫でる。それから洗面所に移動して「もしもし」と

電話に出た。

『ああ燦太^{さん}、今大丈夫か？』

「大丈夫。仕事終わってもう部屋におるし。どないしたん？」

手短に済ませたくてすぐに本題に入ったが、そう簡単に終わらせられる内容ではなかった。

『ごめん。実はな、お前に嘘付いてたことがある』

「え？」

『あの時、仕事中やったやろ？　せやから一気に全部伝えと差し支えると思つてな』

叔父の声は非常に深刻なものだった。それも昨日の電話の時よりも、更に重い。

「……どないしたんや？」

『マリアは、叔母さんは用事で一か月家空ける言つたけど、ちゃうんや』

叔父の声が、あまりにも重過ぎる。
嫌な予感が体中を駆け巡った。

『置手紙をして、いなくなつたんや』

心の蔵を貫かれたような感覚に襲われ、しばらく呆然と立ち尽くした。

「……………嘘やろ？」

あまりにも唐突過ぎて信じられず、ようやく返せた言葉がそれだった。

開幕宣言 十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈日本／東京

さて、いろいろと伏線を貼りまくりました(；、、)

これから少しずつ紐を解いていく所存ですww

道はまだ長いぞ(ノ。。(ヨッ！

A d v e n t ? (前書き)

ふう……………

皆さん、大変長らくお待たせしました（ハハヅ

伏線をまとめるのに時間かかって、ようやく待降節に入りました。
てゆうかもうとくに十二月なってるし（汗） 遅すぎだ！

十二月中に書き上げたいんだけど、果たして間に合うかどうか（@
ー@:）

……とりあえず、やれるだけやってみます！

話の流れはもう大体出来てるんで 繋げるのに苦労しているところ
です。自分で張った伏線なんです（苦笑）

待降節（本編）は、ドイツ、アメリカ、日本とそれぞれ分けていく
つもりですww

それではどうぞ！

A d v e n t ?

瞼が上がると共に、朝日が目に差し込む。

セシルはぼんやりと朝であることを理解し、体を仰向けに転がした。天井を始めに、部屋の中を仰向けのまま眺める。

いつもの寮の部屋では無い。所々に可愛らしい小物が飾られた、女の子らしい部屋だ。マンションの一室にしては広い上にきちんと片付いているので、不動産の物件カタログに載っている写真をそのまま切り取ったような清潔感と解放感がある。

次第に意識がはつきりとしてくる。セシルはすっかり目を覚まそうと体を起こした。改めて部屋を見回したが、部屋の主はいない。仕事かと思っただが、今日は日曜だ。いくら忙しいとはいえ、さすがに今日は休みのはずだ。

ふと視線を下すと、ベッドの傍らの小棚に置いてある一枚のメモを発見した。

『さつき会社から呼び出しがあったので、急だけど仕事に行くことになりました。出掛ける約束をしてくれたのにごめんなさい。その代わり、今週の金曜に休みを取っておきました。その時にあなたが良ければ約束通り出掛けましょう。 レイラ』

ざっとメモに目を通すと、セシルは手を口元に寄せて考え込んだ。しまったな。

休みだとばかり思っていたから、少し無理をさせてしまった。

後で一言謝っておこうと思いながら腰を上げ、固めて置いてある服を取って着た。眼鏡を外そうと目に手をやるが、眼鏡の感触はない違和感を覚えたが、すぐに昨日は眼鏡を掛けずに寝たことを思い出した。

日常的に千里眼を駆使すると目が疲れる。だから敢えて度の強い眼

鏡を掛けて視界をやむやにし、何も見ないようにすることで目を休めるのだが、休めている内にそのまま寝に入ってしまうことがほとんどだ。昨日は目を休める以前に恋人との戯れたわむがあったので、眼鏡を掛ける必要が無かったのだった。

セシルは部屋の棚にちゃんと眼鏡が置いてあることを確認すると、とりあえず何か食べようとリビングへと移動した。その時だった。ピロロロ ピロロロ ピロロロ

携帯の着信音がベッドの方から鳴り響く。セシルは引き返し、ベッドの傍らに置いてある携帯を手についた。レイラだろうかと淡い期待したが、表示された名前もまた予想外だった。

T a k a k i K i m u r a

木村貴樹きむらたかき

確かに昨日、木村家に電話をかけたけど、まさかお義父おじいちゃんさんから電話が直接掛かってくるとは思っていなかった。

母マリアの現在の夫。そして、妹バージニアの現在の父。

木村家に電話を掛ければ、大抵母かバージニアが出てくる。義父おじいちゃんは仕事で家を空けていることが多いから、滅多に出てくることは無い。ただど誰も出てこなかった。夜なら二人ともいるはずだろうと思つて、日本が夜である時間帯に折り返し掛けても同じだった。ということ、家には誰もいないということになる。

しかも仕事が忙しくて顔を合わせることが少ない義父から、直接この携帯に掛けてきたのだ。やはり、何かあったのだらうか？

セシルは頭の中でぐるぐると考えながらも、鳴り続ける携帯に応じた。

「もしもし」

「もしもし。セシル君、久しぶりだね。元気にやってるかい？」

「ええ。お義父さんの方も元気ですか？」

「ああ。君が元気そうで何よりだ。ところで、そっちはやはり朝だろつか？」

義父は翻訳を生業にしているだけあって、英語の発音が滑らかだ。

英語が第二の母国語であるセシルにとっても、非常に聞きやすい喋り方である。

「ええ。たった今起きたところです」

「そつか。すまない。朝から突然電話を掛けてしまつて」

「いいえ、休みですし大丈夫ですよ。それに、何か事情があつてのことでしょうか？」

「ああ。ちよつと、君に聞きたいことがあるんだ。いいかな？」

「ええ。いいですよ」

「あの……」

躊躇いがちな声が聞こえて少し間が空く。何か言いにくいことなんだろうか。

「セシル君、昨日マリアを、お母さんを見かけなかったか？」

「母さんを、ですか？」

セシルは思わず眉を顰めた。母は日本にいるのだ。このドイツで見かけるはずがない。

「いいえ」

「そつか」

でも一か月も手紙が来ないし、昨日家に電話を掛けたら誰もいなかった。それに、義父の声も何だか深刻な様子だ。やっぱり間違いない、何かあつたのだ。

「ただ、少し気に掛かることはあるんです」

「気に掛かること？」

「ええ。実は、母さんから手紙が一月近く来ていないんです。あのマメな母さんが手紙を一月以上も寄こさないなんて初めてだから変だなんて思って、昨日そちらの家に電話を掛けたんですよ。そうしたら誰も出てこなかったんです。母さんも、ジニーも。数時間後に折り返し掛けても同じでした。二人とも、夜には絶対にいるはずだと思っただんですが」

事実を簡潔に述べると、義父は『ああ……』と嘆息を漏らした。『そうだったのか。すまない』

「何かあったのですか？」
思い切って問い掛けると、義父はパタリと口を閉ざしてしまった。義父が返答するのに、かなり間が空いた。

『先週の木曜日に、マリアが置き手紙をしていなくなっただよ』

いなくなっただよ？

セシルは返す言葉を失った。さすがに、それは予想していなかった。冗談ではないかと聞きたかったが、冗談を言うためにわざわざこうして電話を掛けてくるわけがない。

「ジニーは、どうしてますか？」

『甥の燦太郎おいらんに預けている』

「え？」

『僕は出張でアメリカにいるから、しばらく家には誰もいないんだ。現に僕は今、アメリカから君に電話を掛けている』

「なるほど」

それで家に掛けても、誰も出てこなかったのか。

「母さんは、お義父さんが出張に行くことを知っていたのですか？」

『いや、ここ最近家は空けることが多かったから、まだ伝えていなかったんだ』

「でしうね」

あの生真面目で優しい母さんが、娘を一人にするはずがないのだから。

『それで先週、伝えようとした矢先に、手紙を発見した』

「何て書いてあったんですか？」

『このまま傍にいたら、私はジニーを壊してしまう。そんな自分が怖い。だから、少し頭を冷やさせてください。どうか探さないでください。お願いします』

傍にいたらジニーを壊してしまう。

その言葉だけでは原因は分からなくても、母が苦しんでいることは痛いほど伝わってきた。

だがセシルなりに、ある事態を予想していた。

「ジニーを、叩いたんですね？」

『……さすがは息子だね。その通りだよ』

「昔から、そういうことが時々ありましたから。まあ……父が亡くなった時は、特に不安定だったんで頻繁でしたけど」

そう。母さんはとても優しい人だ。だからあの人が子供を叩く時は決まって情緒不安定で、叩く回数が多ければ多いほど、その悩みも深刻なものだ。

そして今回は、家を飛び出してしまうほど不安定だということだ。

その状態で叩いたとなると………かなりのものではないだろうか。

「ジニーに、怪我はありませんか？」

『大怪我ではないけど、叩かれた際に、勢い余って机に激突したらしい。それで肩の辺りに打撲が出来た。本人は大丈夫って言うけど、絶対強がっていたと思う』

「そうですか」

このままジニーを壊してしまうというのは、そういうことか。

全く、あの人は………。

セシルは溜め息交じりに苦笑した。やっぱり昔から変わらない。

「なるほど。大体飲み込めましたよ。母さんのことだから、また怪我をさせたらどうしようと不安になって、衝動的に家を飛び出してしまったんでしょうね。いくら叩かれたって、子供にとって親と離ればなれになるほど辛いことは無いのに」

「……ああ。だからジニーにはまだ言っていない」

「何ですって？」

バージニアも知っているとばかり思っていたから、セシルはつい声を荒げてしまった。

「あの子には、急用が出来て実家に戻ったとだけ伝えてある。叩かれてからまだ日が浅い。今家出されたなんて知ったら、どんなに不安になることか」

「……正しい判断だと思いますよ」

母親に叩かれた上に置いて行かれたなんて、幼い子供には耐え難い事実だ。いずれは知ることになるだろうが、今その事実を突きつけるにはまだ早過ぎる。

問題は今現在、バージニアを保護している人間だ。今のバージニアの精神状態は、母親に代わって彼の言動に左右されるのだから。

「ところで、あなたの甥^{おい}はそのことについてどこまで知っているんですか？」

「燦太にも、今君に言ったのと大体同じことを伝えた。そしてマリアが家出した件は、ジニーにはまだ伏せておいてくれと念を押している。だから君も」

ガッ！

ガシャン、と携帯を落としたような音が耳に入る。

「お義父さん？」

呼び掛けてみたが、返事は無かった。何やら足音らしき音と、怒鳴り声のようなものがいくつも重なって聞こえる。その中には、義父の抗議の声も混ざっていた。

突然のことに、さすがのセシルも狼狽えた。

「もしもし、お義父さ」

グシャツ

ツー ツー ツー ツー

何かが潰れる音と共に、義父との通信は完全に途切れた。何かあったかは知らないが、この様子では再度掛けることは不可能だろう。セシルは仕方なく携帯を閉じた。

お義父さんは、大丈夫なのだろうか？

義父の身を案じるものの、当然アメリカにいる彼に手を差し伸べることなど不可能だ。とにかく、無事であることを祈るしかない。

あ。

ふと、セシルはあるものを目で捉えた。セシルの前方にある戸棚には、趣味で集めたのであろう小物が飾られている。ほとんどが可愛い人形や木工細工で、それらがこの片付き過ぎた部屋に生活感をもたらしているのだろう。

セシルが見つめているのは、サンタクロースを模ったくるみ割り人形だった。くるみを割るという性質上、歯がむき出しになっているので怖い顔をしている物が多いのだが、これはメルヘンチックなデザインを施されており、くるみ割り人形にしては実に可愛い。そのくるみ割り人形から、あの視線を感じるのだ。

またか。

セシルは目を細め、値踏みするようにくるみ割り人形を見つけた。この三日間、あの視線に至る所で発見した。クリスマス・マーケットのメイン会場である中央広場を始めに、僕が住む寮、レイラが住むこの部屋。

あの視線は間違いなく、僕とレイラを追っている。

十二年前のある日に突然、僕が並はずれた視力を得てから度々見かけていたけど、短期間で視線を何度も感知するなんて今まで一度も無かった。

それに、初めてだった。あの視線が僕だけでなく、僕の周りも見つめるなんて。

本当に、最近はおかしなことばかり起こっている。一か月以上届かない母さんの手紙、マリーの父親に関する疑惑、頻繁に感じる視線、そして母さんの家出。

ピロロロ ピロロロ ピロロロ

閉じたばかりの携帯から、再び着信音が鳴り響いた。今日は電話が多いなあと思いながら、セシルは手元の携帯を見た。

N i k o l a M o r n i n g

ニコラ・モーニング。この人から電話が掛かってくることも、全くの予想外だった。本当に、今日は予想外のことばかりたて続けに起こる。

セシルは再び衝撃的な事実を突きつけられることを覚悟し、少し身構えて電話に出た。

「もしもし」

『おお、セシル。元気か？』

電話の向こうから聞こえるのは、年老いた男性の声だった。年のせいか少し掠れているが、明るい声色で、気さくな人柄であることを

伺える。

「うん。そつちは体大丈夫？」

『まだまだ元気だよ』

ハハハとニコラの笑い声が耳に入る。

本当に、母さんの父親とは思えない陽気な笑い声だ。母さんがこの陽気さを受け継いでいれば、早まって家を飛び出すことも無かつただろうに。

「でもおじいさん、夜更かしは体に毒だよ。アメリカはまだ夜中だろっ？」

『あと二時間ほどで朝だ。私は早起きなんだよ』

「もう少し寝ても良いと思うけどなあ」

『心配するな。ちゃんと六時間、睡眠は取ってある』

「それならいいんだけどさ。ところで、何か用があるんだろう？」

『ああ。実はな、お前に重大なことを伝えようと思うんだ。突然だが単刀直入に言うから、覚悟をしておきなさい。いいね？』

やつぱり……………ただ事では無いな。

さあ、今度は何を宣告される？

予測が当たっていたことに、不謹慎だと思いながらも少し喜びを覚えた。

「ああ、大丈夫だよ。おじいさんは昔から、突拍子も無いことを言うからね」

『よし、その意気だ。実はな……………』

だが、そうやって喜んでいたのは束の間だった。

『私はついさっきまで、お前のことを覗いていたんだ』

「……………は？」

今度は本当に予想外だった。それ故に、ニコラの言ったことを瞬時

に理解出来なかった。

「……覗いてるって、どういうこと？」

『お前の目の前に、サンタクロースのくるみ割り人形が置いてあるだろう？』

ニコラの声に導かれるまま、セシルは目の前のくるみ割り人形を見る。今は何も感じないけど、おじいさんから電話が掛かってくるまではこの人形から視線を感じていた

あ！

「まさか……………」

『そう。お前が十二年ほど前から感じていた気配の正体だよ。時折、お前のことをこうして覗いていたんだ。様々な物体に意識を移してな』

セシルは返す言葉を失った。あまりにも予想外で、何て言葉を返せばいいのかわからない。口が達者なセシルだが、こればかりはどうしようもなかった。

『何なら、嘘ではない証拠をあげよう。そこはお前の部屋ではなく、恋人の部屋だろう？ 今は、彼女は急用で仕事に行ってしまったから部屋にはお前しかいない。そしてつい今しがた、貴樹^{たかき}から電話が掛かってきて、マリアが家出したことを告げられた』

図星だった。ニコラの言葉が、先ほど目を覚ましてからの状況を忠実に再現している。

『ああ、言っておくが盗聴器などは一切使っていないぞ』

そんなことは分かっている。あの視線が盗聴器の類じゃないことは、小さい頃から嫌というほど知っているのだから。第一、おじいさんはそういった機具をあまり好まない人だ。

ということとは、おじいさんには何らかの超人的な力があると考えた方が合理的だ。

ファンタジーじみたむちゃくちゃな結論かもしれないが、僕の場合はその答えに辿り着いても不思議じゃない。僕だって、五キロ先でもはつきりと見える異常な視力を持っているのだから。

だけど、頭でそうやって考えることは出来ても、すぐには突きつけられた真実を受け入れることは出来なかった。信じられなかったのだ。

今まで時々感じていたあの視線が、おじいさんだったなんて。

『どうしても信じられないか？ まあいきなりで驚いているのだろうが、お前なら信じられるはずだ。お前だって、常識から外れた視力を持っているんだから』

やっぱり、そこもお見通しだったか。

「……………いや、信じるよ。おじいさんが下手な嘘を付かないのは、よく知ってるからね」

これは内心で降参ポーズを取らざるを得なかった。ここは信じておかないと、話が円満に進まない。話はこれで終わりではないはずだ。超人的な力で覗いていることだけを伝えるためだけに、夜中にアメリカからドイツにいる孫に電話を掛けてくるはずがないのだから。セシルは難しいことをぐるぐる考えるのは止めにし、本題に入ることにした。

「とりあえず、小さい頃からの覗きの理由は後で聞くと。ちゃんとした用事があるんだろう？」

『……………さすがは私の孫だ。呑み込みが早い。そうだな。ここで一気に話してしまつては、話がややこしくなってしまう』

ニコラは間を空け、それからゆっくりと話し始めた。

『先ほど、お前を覗いていると言ったな。だけどここ数日間はお前以外の人たちの様子も覗いていたんだ。その中には、お前の恋人

も含まれている」

「やっぱり、レイラのことも見えていたんだね」

「まあな。ああ、言うておくが私は恋人同士のプライベートを覗いたりはけしてしない。だからそこところは安心しなさい」

「……ああ、分かったよ」

予想外のことを次々と受け入れていたから考える余裕が無かったけど、確かに恋人とのプライベートまで覗かれては堪ったものじゃない。

「最初はちよつとした気まぐれだったんだ。サンタクロースと九頭のトナカイが主人公の、クリスマスをモチーフにした絵本を書く予定だな」

「へえ」

ニコラはアメリカの有名な絵本作家で、彼の本は海外でも翻訳されたものが出回っている。大きな書店では、必ず『ニコラ・モーニング』の名を見かけることが出来る。

「サンタクロースが家の窓から覗いて垣間見る、九頭のトナカイたちの日常といった内容なんだ。それでトナカイのモデルとして、お前と恋人のレイラさんを含めた、計六人の言動を参考にしてみようかなと思って覗いていたんだよ。おっと、その六人に定めたのにはちゃんと理由がある。後ほど話すよ」

話を聞いている内に、絵本の内容などどうでもよくなってきた。

問題はその後だ。モデルなんて言葉を使ってちゃっかり正当化しているが、これはどう考えてもまともな人間の取る行動ではない。

「ちなみに、その人たちに覗き見の許可は？」

「馬鹿を言え。こっそり覗いてこそ日常をありのままに見られるんだ」

ニコラは悪びるどころか、堂々と断言してのけた。あまりにも自信満々な声色なので、セシルは呆れて思わずため息を吐いた。

「……………それは立派な犯罪だと思うけど？」

「大丈夫だ。覗いている時、私自身は眠っているんだ。それにさっ

きも言ったが、踏み込んではいけない範囲は覗かないし、第一寝ているんだから実質的には覗いていないことになる』

「まあ……………そうだね」

そういう問題じゃないと思ったが、もう何も言わないことにした。この人の陽気で大胆な性格はよく知っている。これ以上言ったってどうにもならないのは目に見えていた。

『だが遊び半分で覗いている内に、マリアが家出をしたことを知ったんだ。それを始めに、何やらあちこちで良からぬ変化が起こっていることに気が付いてな。お前も一昨日、教え子に相談を持ち掛けられただろう？』

セシルは少し驚いた。ここでローゼマリーの話題を出されるとは思っていなかったのだ。

「あれは、母さんの件とは全く関係ないだろう？」

『…………その相談事については、私の方から後日お前に話す』

もしかしたら、おじいさんは知っているのだろうか？　ローゼマリーの、生き別れの姉とその母親のことを。

いや、きっとそうに違いない。絵本を書くために、いろんな人の日常を覗き見しているって言ってたじゃないか。それで、あの手紙や写真の真相を得たんだ。

だったら、別にここで教えてくれてもいいと思うんだけどなあ。

『いいな？』

だけど、ニコラは口調を強めてその話に触れないよう念押ししている。

僕が知ると、そんなにまずいことなのだろうか？

「……………分かった」

あまり納得いかないが、ここは素直にニコラの言葉に従うことにした。

『それでな、アメリカでは、今まさに異変が起こっているんだ。さつき貴樹と電話で話して、途中で切れてしまっただろう？』

「うん。争ってるような音がしたよ。一体何があったか、おじいさ

んには分かる？」

『分からん。お前の電話で、ただならぬ事態が起こったことは分かったがな。今から覗きに行ってくるから、一度電話を切るぞ。覗くにはどうしても寝に入る必要があるからな』

いつも陽気なニコラの声が、真剣そのものだった。

ニコラは家族との絆を大切にする人で、娘の旦那というだけで血の繋がりの無い貴樹を実の息子のように可愛がっている。二人揃っているところは二・三回しか見たことないが、彼らが笑い合って楽しそうに話しているところを見る度にそう思えた。

「分かった。それじゃあ」

セシルが了解すると共に、プツンと電話の切れる音がした。

Intermission 幕間？（前書き）

幕間ですww 『彼』の解説つてとこですvv

ドイツ・アメリカ・日本のそれぞれの話で、ところどころに入れて
いきますww

Intermission 幕間？

マンハッタン郊外に佇む一軒家に、一人の老人がいた。

椅子に腰かけているその老人は小太りで、白い髭を頬から顎にかけて豪快に生やしている。豪快とはいっても汚らしくはなく、それなりに手入れが施されているので、老人の雰囲気の良い具合に醸し出している。そして肉がたつぷり付いた顔には老眼鏡を掛けており、赤い服を着ていないことを除けばサンタクロースそのものである。ニコラ・モーニングは手を伸ばし、卓上の受話器に電話を置いた。古びた机の上には本がいくつも積み重なっていて少々埃っぽい、散乱しているわけではなく、使いやすいようにある程度は整理されているので見苦しくない。

さてと、とりあえず大まかなことは伝えた。

ニコラはふうと息を付くと、座っている椅子の背もたれにドンと寄りかかった。

それにしても、さすがは私の孫だ。私と同じように『力』を持っているということもあるだろうが、やはり話の呑み込みが早い。単刀直入に話したことを頭の中で瞬時に整理し、簡潔にまとめる。昔から頭の良い子だったから、そういう点では人より優れていると思う。会話が上手なだけではない。あの子はとても優しい子だ。周りにいる人間をよく観察し、相手が今どんな状態なのか、何を思っているのか、何を求めているのかをじつくりと見極める。人との会話において時折言葉遊びをして楽しむ変わった癖はあるものの、基本は相手のことを思いやって行動している。

そう。あの子の心根はとても優しいのだ。

だが、それ故に心配なことがある。

何が心配かは後に伝えることにしよう。とにかく、私が今回あの子に執拗に視線を送り、自分の存在を知らしめた理由はそこにあるということだ。普段は何の支障も無いのだが、今回は少し話が違う。

あの子の家庭教師のバイトにおいての生徒、ローゼマリー・克蘭ツが持ち出した二枚の手紙と一枚の写真。あれは、あの子にとって大きな障壁となりえる物だ。

もしも真実を知ったら、あの子は大きなショックを受けるはずだ。あの子のことだから取り乱しはしないだろう。だが……………

……………今は語らないでおくよ。

今の時点では、必ずしも起こるとは限らないからね。

さてと、あの子に貴樹の様子を見てくると言った矢先だ。この話題はひとまず置いておこう。

ニコラは椅子から立ち上がり、ベッドへと移動した。意識を飛ばした後、本格的な睡眠を取るためだ。意識を飛ばしている間は確かに眠っているが、意識ははつきりとしているため非常に眠りが浅い。要するに、夢を見ているのを自覚している状態だ。

さあ、行くとしよう。

アメリカのニューヨークに訪れた貴樹^{たかき}の元へ。

A d v e n t ? (前書き)

アメリカ編の待降節もスタートしました！

Advent?

マンハッタンはよく「眠らない街」と形容されるが、多くの人々がイメーじするのはマンハッタンの中央に位置するミッドタウンの街並みだ。高級ショッピングやデパート、レストランが凝集した五番街や、世界一有名な交差点とされるニューヨーク最大の繁華街タイムズ・スクエアなどが特に有名である。

だが、マンハッタンの下部に位置するダウントウンは煉瓦の建物など、古くからの街並みが残る比較的静かな街だ。中でもグリニッジ・ヴィレッジはかつて作家や画家、音楽家といった多くのアーティストが住み着いた芸術の町である。

また、バーやクラブなども数多くある。夜が深まるにつれて多くの店が閉まり、町に点在するナイトクラブが活気づいて一段と賑わのだが、タイムズ・スクエアのような騒がしさはない。あちこちの店の淡く落ち着いたオレンジ色の電灯と、大人たちが夜のディナーを楽しむことによって生み出されるもので、何ともロマンチックな雰囲気味わえる賑わいである。今はそれにクリスマスイルミネーションが加わっており、より幻想的な空気が流れている。

そしてもう一つ、グリニッジ・ヴィレッジはジャズが昔から盛んで『ブルー・ノート』や『ビレッジ・バンガード』といった有名なジャズクラブが残っている他、至る所にジャズバーやジャズクラブなどがある、前を通りかかると店から漏れるジャズの音色が耳に入ってくることもしばしば。近頃はクリスマス・シーズンということもあって、所々でクリスマスソングを耳にすることが出来る。

ジェイミーは肩にショルダーバッグを掛け、そんな通りを一人淡々と歩いていた。グリニッジ・ヴィレッジは観光名所としても有名だが、地元に住むジェイミーにとっては見慣れた景色の一部でしかない。

道に建っている時計を見ると、もう午前四時を過ぎていた。中学生

の彼がそんな時間に、しかもこんなナイトクラブが凝集した通りを一人で歩のには一応訳があるのだが、それはまた後ほど。

ふと、向こうの曲がり角から出てきた人影がこちらに走ってくるのを目にした。その見慣れた出で立ちに、ジェイミーはハアと大きな溜め息を吐いた。

「ジェイミー、良かった」

エミリはジェイミーの目の前に来たところで立ち止まり、肩を上下させながらほうと白い息を漏らした。

「探したのよ。迎えに行くから、店の前で待っててって言ったのに、いないんだもん」

「だから迎えなんかいらねえつつたろ。てゆーか何で来てんだよ。店から出る前に『一人で帰るから来んな。待たねえからな』ってメール送つたろーが」

ジェイミーは眉を顰めるが、エミリは構わず息を切らしながら「だって」と言葉を続ける。

「こんな夜中に、一人で歩いたら危ないじゃない。まだ中学生なのに、もし誰かに襲われたりしたら」

「んな簡単に襲われるかよ。つーか、危ねえのはそつちだろ。強盗一人追い出せない奴が、真夜中に女一人で出歩いてんじゃねーよ。襲われたら即アウトじゃねーか」

「大丈夫」

エミリは珍しくはつきりと断言すると、何やらコートのポケットから小瓶を取り出した。

「コシヨウがあるから」

得意げにコシヨウの小瓶を目の前に突き出す姉に、ジェイミーは思わず苦虫をかみ砕いたような顔になった。

「そりゃあ止めとけ。成功する確率低い上に失敗したら逆上しかないぜ」

「いざとなったら走って逃げるよ。大声も出すし」

「足遅え奴が何言つてんだよ。とにかく、もう来んなよ。後で面倒

なのは俺なんだ」

「大丈夫！ 絶対ジェイミーを巻き込んだりなんかしないから、安心して」

終いには真剣な顔つきで断言し、安心させようとしているのか微笑みを浮かべながら両手でジェイミーの手を取った。その健気としか言い様の無い姉の行動を前に、ジェイミーは照れ臭さと何とも言えないむず痒さを同時に覚え、バツと姉の手を振り解いた。

「あーもう答えんのも面倒くせえ。寒いしとつと帰るぞ」

「あ、待つて」

早足で歩き出したジェイミーの後ろを、エミリがあわてて追いかけた。クリスマスソングが流れる町の中、エミリがふて腐れる弟の隣に並んで歩き出す。早足で歩いていたジェイミーだったが、姉が隣に並ぶと黙って歩く速度を緩め、姉に合わせてゆっくり歩き始めた。そうしてクリスマスイルミネーションやツリーで彩られた町を二人でゆつたりと歩いていたのだが、しばらくして人気の無い通りに差し掛ろうとした時だった。薄暗い路地の横を通りかかると同時に、突然エミリが立ち止まった。姉の足が止まったことに気付いたジェイミーも立ち止まり、振り返って苛立たしげな視線を送る。

「おい、何突っ立つて」

「ねえ、あれって……………」

エミリが視線を向けた先には、数人の男がいた。暗いものではっきりとは見えないが、男たちは十代後半から二十代前半といったところで、皆パンク風のファッションをしている。手にはパイプらしき棒があり、どう見てもチンピラの集団だった。真夜中にも関わらず、それぞれが大声を上げて汚い言葉を吐き出している。

そして彼らの足元には、一人の男性が転がっていた。

「カツアゲ……………かな」

姉の言いたいことはよく分かる。

だからこそ、ジェイミーは即座にこの場から立ち去りたかった。

「ほつとけよ。よくあることだ」

「でも……」

「いいから行くぞ」

ジェイミーは困り顔で立ち尽くすエミリの腕を掴み、半ば強引にその場を通り過ぎようとした。

だが、遅かった。

「おい、何見てんだコラ」

一人が気付くと、他の男たちも倒れている男を蹴るのを止めてこちらにガンを飛ばし出した。

ちい！

ジェイミーは内心で舌打ちしつつ、向こうの様子を慎重に探り始めた。狭い路地である上にこの暗がりの中だ。集団であることが分かって、何人いるかまでは把握出来ない。

……っことは、あつちからもこっちの様子をはっきり把握することは出来ねえよな？

ジェイミーはチラリと横目でエミリに視線を向けた。予想通り、顔を強張らせて怯えている。だから言わんこっちゃない。もたもたしてっからこつなるんだ、くそっ。

心の中で悪態を付きながらも、ジェイミーはまずエミリの身の安全の確保を最優先するべく動き出した。運の良いことに、エミリはジェイミーの影に隠れる位置に立っている。背はジェイミーの方が若

干だが高く、壁になるには十分な身長差だ。

ジェイミーはショルダーバッグを肩から下ろし、エミリに押し付けた。

「音、絶対え立てんなよ」

「え……………っ!？」

小声で呟くや否や、エミリの肩をドンと倒れない程度に強く押して傍らにある廃墟の影に隠した。エミリが声を上げようとするのを素早く察し、思いつきり睨み付けることで黙らせる。

これでエミリの安全はとりあえず確保した。ジェイミーはこの場を片付けるため、再びチンピラたちへと目を向ける。集団の中から二人がこちらに歩み寄ってきた。どちらもやはり鉄パイプを持っている。

そうそう、もつと近づいて来いよ。

内心で挑発しながら、ジェイミーはサツとある表情を作った。今しがたエミリが見せた、追い詰められた子ウサギのような怯えた顔を。

「おお、女の子じゃん」

「いけないなあお嬢ちゃん、夜中に一人で出歩いちゃあ」

……………しめた。

「ん？ もう一人いなかったか？」

「そっぴいねえな。まあ、気のせいだろ」

思った通りだ。馬鹿共が、まんまと騙されやがった。

「あ、あの、アタシ」

ジェイミーはチンピラを心の中で罵倒しながらも、絶えず怯える少女を演じ続けた。男とはいってもまだ中学生で幼さの残る出で立ちであり、しかも声変わりしたにも関わらず女……の声を出せるジェイミーだからこそ出来る技だった。

「アタシ、びつくりしちゃって、動けなかったただけなんです。誰にも言いませんから、だから……」

縮こまりながら後ずさりをするジェイミーに、チンピラ二人は追い詰めるようににじり寄ってくる。

「見逃してくださいってかあ？　おい、どうする？」

「そうだなあ、可愛い女の子のお願いを聞いてやりたいのは山々だけど……ちょおつと無理なお願いだなあ」

「だと。お嬢ちゃん、ごめんねえ」

チンピラの一人が手を伸ばしてくると、ジェイミーは「きゃっ」と小さく悲鳴を上げながら体を翻ひるがえした。

「おつと、逃げちゃダメだって。たっぷり可愛がつてやるからさあ」もう一人がすかさずジェイミーの前に回り込み、逃げ道を塞いでガツと乱暴に手首を掴む。当然のことながら、ジェイミーは激しく抵抗した。

「い、嫌！　放して！」

「るせえ！！　大声出すんじゃねえ！」

「誰か！　誰か助け……んぐうつ」

「このアマ、大人しくしてろあ！！」

それぞれが怒鳴り散らしながら、後ろにいる方が羽交い絞めにし、手首を掴み続けている方が悲鳴を上げるジェイミーの口を強引に押さえた。

瞬間、ジェイミーの眼からスツと怯えの色が消えた。

「あがつ！？」

ジェイミーの足が、目の前で口を塞いでくるチンピラの股間を思い

つきり蹴り上げた。

「があああ！！ あ、あが……っあ」

当然、ジェイミーの口を塞ぎ続けることなど不可能だ。蹴られたチンピラはその場で崩れ落ち、両手で股間を押さえてアスファルトの上を転がり出した。

「え、な？ おい……ギャツ！」

後ろで羽交い絞めになっていたチンピラは、足の甲を力いっぱい踏み付けられて反射的に体を曲げた。

「……っが、テメ　　ぶぐう！！」

それからすかさず、ジェイミーが男の顔面目掛けて頭突きを喰らわす。頭突きをもろに受けたチンピラも転がる方と同様にジェイミーを羽交い絞めから解放し、鼻血をボタボタと垂らしながらうずくまった。

「ほらほらどおしたあ？　揃いも揃ってミミズみてえに這いつくばりやがって。そのみつともねえ面でアタシをたっぷり可愛がるんじやなかったのかよお？」

拘束から解放されるや否や、声だけ女のままでいつもの乱暴な口調に戻った。それどころか普段の倍テンションを上げ、相手を見下して挑発する態勢に入っている。

「おいテメエ！　何やってんだコラア！！」

「ぶっ殺されてえのかアア！？」

「犯すぞてめえ！！」

仲間二人に異変が起けると、奥の方で男を囲んでいた数人が一斉に声を荒げた。ジェイミーはチンピラ達の罵倒を無視し、足元に転がる鉄パイプを拾い上げた。

「おいコラ！　聞いて」

「止めとけよ。何かあったら、不利なのは女に寄ってたかって暴行加えたテメエらの方だぜ？」

ジェイミーはニヤリと口の端を釣り上げ、小馬鹿にしたような目を見る。

「るせえ！　もう女だからって容赦しねえぞ！！」

「ぶち犯したらあー！！」

挑発に乗せられたチンピラ達が鉄パイプを振り上げ、狭い路地を行列となつてジエイミーへと勢い良く押し寄せてくる。ジエイミーはその光景を前にしても、余裕の笑みを少しも絶やさない。

「……………ぶあーか」

そう悪態を付いたジエイミーの声は、さっきまでと同じ男に戻っていた。

「ほら、冥土の土産に持つてけよ」

呟きながら手元の鉄パイプを振り上げ、前方に向けて力いっぱい投げ飛ばした。

もちろん、拾ったばかりの鉄パイプを投げ捨てるという予想外の行動に対応出来るわけがないが、それ以前にここは狭い路地だ。避けられるはずがない。鉄パイプは一番前にいた男に直撃した。

そして鉄パイプはそのまま、後ろにいる数人にも襲いかかった。更に後ろは鉄パイプの被害を逃れたものの、前から倒れてくる仲間に押され、ドミノ倒しのように崩れ去っていく。狭い路地で、逃げ場など無い。

「ガアッ」

「うぐう！」

「ちょ、ま……………ゴワッ！！」

「お、おいバカ止め……………ギャアッ」

そして鉄パイプがカランと音を立てて落ちた頃には、大勢いたチンピラ達は全て地に伏していた。

「あつたま悪すぎんだよ。せめて俺を路地の外に追い出してから殴り掛かれっつーの」

ジェイミーは目の前に出来上がったチンピラの道を一瞥したところで、バツと後ろを振り返った。

「もういいぞ」

廃墟の影に隠れる姉に向かって大声で呼びかけた。だが、エミリが動く気配が無い。

「おい、もういいつつってんだろ」

し　　ん

「……エミリ？」

おかしい。エミリの気配を全く感じられない。つい今までチンピラ達を嘲笑っていたのが嘘のように、そわそわと目を泳がせる。

「……何シカトこいてんだよ」

自分でも気づかない内に、年相応の不安げな表情になっていた。

「おいったら！」

ジェイミーの早口に合わせて、白い息が乱暴に吐き出される。先ほどのように余裕を保つことなどすっかり忘れ、声を荒げて路地を抜け出た。キョロキョロと見回しても、エミリの姿は無い。

「エミリ！　いい加減、返事し」

「ジェイミー！」

耳に聞き慣れた声が飛び込んできた。ジェイミーはすぐさま、声が出た方を振り返る。暗闇の向こうから慌ただしい足音と共に、シヨルダーバッグを大切に抱えるエミリが姿を現した。そして再びジェイミーの前に立ち止まり、ハアハアと息を弾ませながらシヨルダー

バッグごと弟を抱きしめた。

「ジェイミー、無事で良かったあ。ごめんね、本当にごめんね。怪我はな」

「何やってんだよこの馬鹿姉貴!!」

ジェイミーがエミリの肩を掴み、乱暴に引き剥がしてガクガクと揺らしながら怒鳴る。エミリは驚いて目を見開き、「え、え?」と困り顔で戸惑った。

「絶対え音立てんなったのに、勝手にいなくなりやがって!どこ行つてたんだよ!」

「こ、公衆電話を探しに……」

「はあ?」

「誰か助けを呼ぼうと思ったんだけど、この辺りって廃墟ばっかで人いなさそうだし、だから通報しようと思ったんだけど、携帯家に置いてきちゃって、それで近くに公衆電話あったらそれで通報しよう」

「馬鹿! んな人気の無い通りに公衆電話がゴロゴロ転がってるわけねえだろ! つーか、俺のバッグに携帯入ってたんだろーが!!」

「……あ」

エミリは惚けた声を出しながら、手元のショルダーバッグに視線を落とした。

「ごめんなさい。でもあなたが『助けて』って言ってるの、黙って見てるなんて出来なくて」

小さくなつて肩を縮めながらも、懸命に言葉を続けるエミリ。

……………この、馬鹿。

ジェイミーはエミリの肩を掴んでいた手を放してショルダーバッグをもぎ取ると、溜め息交じりに舌打ちをした。

「演技に決まってるんだろ、あんなの」

「分かってるよ。でも、もし本当に何かあったらどうしようかと思

って、その……」

エミリは申し訳なさそうに目を伏せ、言葉を弱々しく濁す。だが、すぐにバツと顔を上げた。

「ごめんなさい。私、心配かけさせるつもりは無かったの。本当にごめんね」

謝るエミリの声は、今にも泣きだしそうだった。

「……もういい。帰るぞ」

「うん。………あ、待って」

エミリに袖を掴まれると、ジェイミーは歩みを止めて苛立たしげに声を荒げた。

「今度は何だよ！」

「ほら、あの人……」

エミリは路地の奥で倒れる男を指差すと、路地で倒れるチンピラ達を踏まないように気を遣いながら男の元に歩み寄ってしゃがみ込んだ。

「良かった。ちゃんと息してる」

エミリが安堵の息を漏らす。仕方なくジェイミーも早足で路地に入り、チンピラ達を時折アスファルト同様に踏み付けていきながらエミリに声を掛けた。

「そんなんほつとけよ。目え覚めりゃあ自分で何とかすんだろ」

「でも、怪我してるよ」

確かにエミリの言う通り、男は頭から血を流していた。おそらく、鉄パイプで殴られたといったところだろう。そして怪我をしている以外に、バッグの中身が散乱しており、携帯も壊された様子である。

「それにこの人………」

暗い中ではつきりとは分らないが、この男性の出で立ちに見覚えがあった。四十代くらいの男性で、線の細い顔立ちに身だしなみの整った好感的な男性。

昨日の朝、グリニッジ・ヴィレッジ行きバス停の場所を訪ねてきた、観光客らしき東洋人の男性だった。

「おい、まさか連れて帰るとか言い出す気じゃねーだろうな」

ジェイミーに凶星を突かれたエミリは、気まずそうに俯いた。

「……駄目？」

「当たり前だろ。犬とか猫じゃねーんだぞ」

「じゃあ、せめて病院に」

「ここから病院までどんだけあると思ってんだよ。救急車呼ぶだけ時間の無駄だ」

「でも、このまま放っておいたら死んじゃうかも。怪我してるの、頭だけじゃないと思うし」

「知るかよ。てか、死ぬ前に目え覚ますに決まってるだろ」

「でも……」

エミリはジェイミーに駄目出しを喰らって口籠るが、けして男の傍から離れようとしめない。初冬の寒さの中で、この状態が一分以上も続いた。

その上、エミリが時折するるように目を潤ませてくる。

「……手当するだけだぞ」

ジェイミーが吐き捨てるように言つと、エミリはパツと表情を明るくした。

「うん！ 大丈夫よ。もう絶対、ジェイミーを危ない目に合わせた
りしないから、安心して」

エミリが満面の笑みを浮かべると、ジェイミーはまたそっぽ向いた。
「俺よりも自分の身を心配しろよ。とろくせえんだから」

ジェイミーがエミリに聞こえないように悪態を付く。

「……ありがとう」

だがその呟きは、エミリの耳にしっかり届いていた。それでも傷ついた様子はなく、逆に感謝の言葉を贈ってきた。

何とも言えない照れ臭さを覚えたジェイミーは、不機嫌そうに「あ
くそっ」と唸り声を上げながら倒れる男を抱え込んだ。「大丈夫
？」とエミリが声を掛けて一緒に抱えようとする。

「何ともねえよ、これくらい」

「でもお」

「手えどけるって。逆に邪魔になる」

「じゃあ、せめてバッグ持ってるよ」

肩に掛けたショルダーバッグにエミリが手を添える。確かに、大の男を抱えながらショルダーバッグも肩に掛け続けるのは正直歩きづらい。

「……ほらよ」

ジェイミーが男を抱えながら器用に肩からショルダーバッグを取ろうとすると、エミリが手を添えてしつかりと受け取った。これは悔しいが助かったので、悪態を付くことはなかった。

「ありがとう」

エミリは満面の笑みを浮かべ、ショルダーバッグをぎゅっと持ち直した。

「……手伝う方がお礼言ってどうすんだよ」

ジェイミーがまたそっぽ向き、男を抱えて歩き出す。エミリは嬉しそうに笑うと、ショルダーバッグを大事に抱えながら弟の背中を追って歩き出した。

Intermission 幕間？（前書き）

今更かもしれませんが、ニコラ＝冒頭に出てきた『彼』です（＃[^]_^）
（＃[^]_^）

Intermission 〈幕間〉

……ふう。

意識をあちこちの建物などに移動させながら、一部始終を見ていたニコラは一安心した。もし生身の体だったら安堵の息を漏らしているところだろう。

良かった。貴樹^{たかき}は無事なようだ。この後ひと眠りしたら、セシルにも報告しよう。

ニコラは完全な睡眠体制に入ろうと、意識を閉じ始めた。うとうととまどろみ出していく。

それにしても、ジェイミー・アンダーソンは相変わらず凄い子だ。元々頭の回転が速いのだろうが、あの様子だと相当喧嘩慣れしているはずだ。

それが、姉がいなくなった途端に年相応な戸惑いを見せて……可愛らしいものだ。

だが、あの声の変わりよう。男から女へ、女から男への声の変化は、並みの力では出来ない。何となく気配を感じて一昨日から時折覗いていたが……。

やはり、あの子も林檎^{りんご}人だったか。

あの様子だとセシル同様、『万能の林檎』のことは知らないが超人的な力を持っていることを漠然と理解し、日常的に使っている。そ

してエミリも驚いていなかったということはおそらく彼の力の存在を知っているのだろう。

しかし……一体どういう経緯で『万能の林檎』を口にしたのだろうか？

私が知っている限り、現在の林檎人は私やマリアを経由して食べたものがほとんどのはずだが……。

まあ何にせよ、あの姉弟が貴樹を救ってくれたのだ。感謝せねばならんな。それに考えたってどうにもならんし。

……………あ。

そういえば、ジニーは今どうしているだろうか。

貴樹の甥である、氷月燦太郎ひつきさんたろうがいるから大丈夫だと確信は出来る。彼のジニーに対する愛情の深さは貴樹と話をすると度々聞いていたし、それに一昨日覗きに行った時に、彼がいかにジニーのことを大切に思っているのがよく分かった。

だが、やはり孫のことだ。心配で仕方がない。

本当は今すぐにでも覗きに行きたいが、どうやら睡魔がそうさせてはくれなさそうだ。昔は多少の夜更かしくらいでへこたれる私ではなかったのだが……………年の波には勝てんなあ。

とりあえず、ひと眠りしたらセシルに電話する前に一度覗きに行くとしてしよう。

ぼんやりとした頭で考えている内に、ニコラは深い眠りの世界へと落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8428y/>

窓サン

2011年12月17日18時52分発行